

星薬科大学報

第98号

2025年11月

Hoshi University

No.98 November 2025

2024年度 学位記授与式の挙行

2025年度 入学式の挙行

2025年度 創立記念式典の挙行

- ・第110回薬剤師国家試験について
- ・基礎薬学教育研究部門の取組
- ・国際交流活動について



目次

No.98 November 2025

● 2024年度 学位記授与式の挙行 …………… 1	● 新任教授のご挨拶…………… 27
● 2024年度 学位記授与式 理事長式辞…………… 2	● 新任教員紹介…………… 28
● 2024年度 学位記授与式 学長告辞…………… 3	● 新任職員紹介…………… 30
● 2024年度 学位記授与式 在学生代表 送辞…………… 4	● 研究室の発足…………… 31
● 2024年度 学位記授与式 卒業生代表 答辞…………… 5	● 2025年度 大谷孝吉記念賞を受領して…………… 34
● 2025年度 入学式の挙行…………… 6	● 星薬科大学に入学して…………… 35
● 2025年度 入学式 理事長式辞…………… 7	● 大学通信…………… 37
● 2025年度 入学式 学長告辞…………… 8	大学行事…………… 37
● 2025年度 入学式 入学生 宣誓…………… 9	事務局…………… 44
● 2025年度 入学式 在学生代表 歓迎の辞…………… 10	経理部…………… 52
● 2025年度 創立記念式典の挙行…………… 11	アドミッションオフィス…………… 54
● 2025年度 創立記念式典 理事長挨拶…………… 12	教務部…………… 56
● 2025年度 創立記念式典 学長挨拶…………… 13	学生支援部…………… 59
● 2025年度 創立記念式典 学長補佐報告…………… 14	図書館…………… 63
～2024年度の事業概要について～	動物センター…………… 65
● 2025年度 創立記念式典記念講演…………… 16	保健管理センター…………… 65
● 第110回薬剤師国家試験について…………… 17	薬剤師生涯学習支援室…………… 66
● 2024年度 就職内定状況について…………… 18	揺籃会…………… 71
● 基礎薬学教育研究部門について…………… 20	同窓会…………… 73
● 植物園ver. 3.0とは何か(薬用植物園の活動報告) …… 21	● 学校法人星薬科大学修学支援基金 寄付者ご芳名… 74
● オープンキャンパス2025について…………… 23	● クラブ紹介…………… 75
● 最近の本学の国際交流活動について…………… 24	硬式テニス部…………… 75
● 第52回星薬祭を開催して…………… 25	箏曲部…………… 76
● 第52回星薬祭を終えて…………… 26	



入場する卒業生(学位記授与式)

学報に係るご意見・お問合せ先
E-mail somu@hoshi.ac.jp



学生によるアトラクション(薬草見学会)

表紙写真：入学式、留学生によるプレゼンテーション

2024年度 学位記授与式の挙行



2024年度学位記授与式を3月15日(土)に、星薬科大学本館メインホールにおいて執り行いました。

当日は、卒業生たちが友人たちと記念写真を撮ったり、思い出話に花を咲かせたりと、思い思いに過ごしていました。会場は晴れやかな笑顔で溢れ、ご家族の皆様もまた、喜びを分かち合うように式典を見守っていました。

卒業生・修了生の入場時には、エトワール・アンサンブル部による美しい生演奏がメインホールに響き渡り、会場全体が厳粛さの中にも温かい祝福の空気に包まれました。

今年度は、大学院薬学専攻課程博士1名、総合薬科学専攻課程博士1名、課程外博士(薬学)1名、課程外博士(薬科学)1名、総合薬科学専攻修士課程11名にそれぞれ、博士学位記、修士学位記が、そして薬学部薬学科254名、創薬科学科26名に対し、学位記が授与されました。全ての卒業生に牛島学長から手渡しで学位記を授与することができました。

大谷卓男理事長による理事長式辞、牛島俊和学長による学長告辞が述べられた後、特別奨学生12名(薬学科10名、創薬科学科2名)、星薬科大学特製白衣10名と学長賞

3名に対し、表彰状が授与されました。

星薬科大学同窓会会長大重基様よりご祝辞を頂いた後、在学生代表送辞、卒業生代表答辞が行われました。在学生代表と卒業生代表の堂々とした立ち振る舞いとはっきりとした声は、伝統ある式典に希望に満ちた明るさを添えてくれました。

卒業生代表者より記念品の寄贈があり、「校歌演奏」、エトワール・アンサンブル部による「蛍の光演奏」で式典は終了しました。

(総務部)



2024年度 学位記授与式 理事長式辞

学校法人星薬科大学 理事長 大谷 卓男



本日、星薬科大学ならびに大学院を卒業される皆さん、誠におめでとうございます。薬学の勉学に励まれ、学位を授与されたことを、心よりお祝い申し上げます。また、ご家族の皆様におかれましても、学校法人を代表して、深く感謝とお祝いを申し上げます。本当にありがとうございました。そして、皆さん、よくここまで頑張られました。本日、皆さんは学位記を一人ひとり学長から受け取られました。どうかこの学位記を、これまで支えてくださったご両親やご家族の皆様にも見せてあげてください。

さて、皆さんはいよいよ社会へと羽ばたいていかれます。これからそれぞれの道を歩いていくこととなりますが、ぜひもう一度思い出していただきたいことがあります。本学の創立者・星一が掲げた理念、それは「社会に役立つ」「親切第一」「高い志を持つ」の三つです。「社会に役立つ」とは、自分のことよりも世のため人のために尽くすという姿勢です。「親切第一」とは、人とのつながりを大切に、何事にも誠実に向き合うことです。そしてこれは、他者だけでなく、自分自身にも当てはまります。自分に誠意をもって努力を重ねる

ことが、自分に対する親切でもあるのです。「高い志を持つ」とは、今の目標より少し上の目標を掲げ、それに向かって歩いていくことです。この三つの理念を、これからも実践し続けていただきたいと願っております。

学長のご挨拶にもありましたように、「考える力」を大切に、新しい知識を学び続けてください。社会は絶えず変化しています。近年ではAIの進展が著しく、今後10年で私たちの想像を超える変化が起きることでしょう。そんな中でも、皆さんは自ら学び、適応していく力を持っています。また、「仲間の存在」も大切にしてください。絆を深め、助け合いながら進んでください。そして「苦労した経験」は、人生の財産です。今後もさまざまな困難があるかもしれませんが、それを一つひとつ乗り越えながら、人生を歩いていただきたいと思えます。

最後に、私からも申し上げます。「大丈夫です」。皆さんの人生は必ずや、希望と成長に満ちたものとなるはずです。改めまして、卒業おめでとうございます。これからの皆さんの人生に幸多きことを心より願っております。

2024年度 学位記授与式 学長告辞

星薬科大学 学長 牛島 俊和



本日、2024年度星薬科大学学位記・修了証書を大学院薬学研究科課程博士両専攻で2名、課程外博士両専攻で3名、修士課程11名、薬学部薬学科254名、創薬科学科26名の方々にお渡しできましたことは、本学の大きな喜びであります。心よりお祝い申し上げます。この良き日を迎えるまで、長年にわたり、ご息女・ご子息を励まし、また、本学に対するご理解、ご支援、ご協力を賜りましたご家族・保護者の皆様方に、教職員を代表いたしまして心よりお礼を申し上げます。

さて、本日、学位記・修了証書を手にした皆さんは、3つの財産を手に入れたことになります。

一つ目の財産は、知識のみならず、知識を得る方法、考える癖を身につけたことです。博士になられた方、博士が目的ではなく、新しい薬や食品を創ることが目的です。薬剤師になられる皆さん、免許が目的ではなく、それを使って患者さんの苦しみを減らすことが目的です。就職された皆さん、会社や社会に貢献する可能性を得ま

した。皆さんは、今の知識は限られていても、新しい知識を求め、作り出す方法を、身につけたはずです。指示されたことプラス α の勉強を続け、自分の能力を高めること、そのまま続けてください。皆さんが絶えず努力している姿は、誰かが見ていてくれます。自分が勉強することで、他人、世界に親切にでき、そして、自分自身の豊かな生活を手にできるはずす。

二つ目の財産は、星薬科大学の仲間になられたことです。薬学科の皆さんは入学した頃はまだサークル活動ができた頃かと思えます。沢山の先輩と知り合いになりましたよね。創薬科学科の皆さんには最初にご苦労をおかけしましたが、卒論の頃には思いっきり研究出来る環境に戻っていたと思えます。卒論研究室では、同級生、先輩、後輩、そして先生たちと知り合いになったと思えます。学生の頃の出来事は、いつまでも続く絆になります。卒業研究室の先生たちは、これからも一生、応援してくれるはずす。

研究室以外でも、例えば、1ヶ月程前に就職説明会がありました。国立高度医療センターや大病院で働いている先輩、世界で薬や食品を販売しているような企業で働いている先輩、調剤薬局やドラッグストアで働いている先輩、公務員になった先輩、たくさんおいで下さっていました。これからは、日本や世界のあちこちにおられる本学の先輩たちも仲間として助けて下さると思います。学会に出かけていっても、世界レベルの研究をしておられる先輩がたくさんおられます。是非、先生、先輩、友人の力を借りて、これからも立派な卒業生として成長を続けてください。そして、周りからの親切は、後輩への親切として、本学の絆を繋いで下さい。

そして三つ目の財産は、大いに苦勞した経験です。薬学科の皆さんは楽しい2年生の時期に登校できず、創薬科学の皆さんはコロナの最中に入学されました。しかし、この苦勞をものともせず、CBTとOSCEに合格して薬局・病院実習にでかけ、学外体験学習もこなしました。卒業論文も立派に仕上げました。コロナでの苦勞、卒業研究での苦勞、就職での苦勞は、皆さんは苦勞を力に変えました。そして苦勞するということは、人の気持ちも分かるようになるということでもあります。自分の責任ではないのにいきなり病気が降りかかってきた患者さんたち、様々な苦勞を抱えておられます。その苦勞を完全に理解するなどという大それた事は難しいですが、少しでも寄り添える経験を積んだことは重要です。

皆さんは少なくとも3つの財産を持っています。しかし、社会にでると思いもかけない困難が普通

にあります。先輩の薬剤師さんや先生の言った通りにやったのに無視されたような気がするなどということも普通にあります。また、国試が来年になってしまった人などもおられると思います。でも、大丈夫です。皆さんには、自ら考える力、仲間、そして苦勞を超える

力があります。先輩と話したり、卒研の研究室の先生を尋ねたり、友達にLINEをしたり、してみてください。

繰り返します。皆さんの、考える力、仲間、そして苦勞をパワーに変える力、素晴らしいものです。

世界、日本、社会、家族のため、大いに活かして下さい。皆さんが、病院、薬局、会社で「さすが星薬科大学の卒業生」と感激されている姿を思い描きまして、私の告辞とさせていただきます。

2024年度 学位記授与式 在学生代表 送辞



春の訪れを日ごとに感じられる季節となりました。この良き日に星薬科大学をご卒業される皆様、誠におめでとうございます。在学生一同、心よりお祝い申し上げます。

今、皆様はこれまでの大学生活をどのように振り返っていらっしゃるのでしょうか。ご入学以来、

学業に励み、多くの経験を積み重ねる中で、コロナ禍という困難にも直面されました。しかし、そのような状況の中でも、仲間と共に学び、支え合いながら、かけがえない思い出を築かれたことと存じます。

先輩方と過ごした日々を振り返ると、いつも私達後輩の先を歩き、導いてくださったことを思い出します。多忙な学生生活の中で学業だけではなく、サークル活動や課外活動、研究室活動など多岐にわたって取り組まれている姿は私たちにとって大きな指針となりました。その背中を追いかけることで、私達は星薬科大学の学生としての自覚を深めることができたように思います。

そのような先輩方が本日ご卒業されることを心より嬉しく思うとともに、寂しさと別れを惜しむ気持ちでいっぱいです。

これからは、私たちが先輩方から学んだことを胸に刻み、後輩の手本となれるよう努めてまいります。

最後になりますが、本日ご卒業される皆様に、心よりの感謝とお祝いを申し上げますとともに、皆様のご健康と今後の更なるご発展をお祈り申し上げ、送辞の言葉とさせていただきます。

在学生代表
福島 千和

2024年度 学位記授与式 卒業生代表 答辞



冬の寒さも和らぎ、春の訪れを感じるこの良き日に、教職員の皆様をはじめ多くの皆様のご臨席のもと、このような素晴らしい学位記授与式を開いていただき、卒業生一同心より御礼申し上げます。また、大谷理事長先生、牛島学長先生並びにご来賓の方々より温かい訓辞と激励のお言葉を賜りましたことに、重ねて御礼申し上げます。

振り返れば、私が星薬科大学に入学したのは6年前。真新しいスーツに身を包み、大きな期待と不安を胸に星薬科大学の門を叩いたその日を、今でも鮮明に覚えています。

大学生活は、新しい人との出会いの連続でした。いつも一緒に講義を受けた友人や、共に切磋琢磨した研究室の友人、実習先で知り合った他大学の友人など、様々な友人との出会いは、私の学生生活

をより豊かなものとし、人として成長させてくれました。

人との繋がり大切さを実感した印象的な出来事として、長く続いたコロナ禍が挙げられます。コロナ禍では、講義はすべてオンラインとなり、サークル活動も殆ど無くなりました。直接人と会って交流する機会が失われたことで、大学生活における人との関わりが、どれほど貴重で大切であるかを改めて実感しました。

だからこそ、コロナ禍が終わり通常通りの学生生活が始まったとき、より一層人との繋がりを大事にしよう、という思いが芽生えたのだと思います。こんな経験を経た私たちは、これまで以上に「親切第一」を大切にしながら、周囲の人と支えあい、歩んでいけるのではないのでしょうか。

私は、薬学を学ぶために星薬科大学に入学しました。しかし、星薬科大学での学生生活を通して得たものは、単純な薬学の知識に留まりません。人との繋がり大切さをはじめとした、数え切れない程の様々な学びは、かけがえのない財産です。

私たちは今日、それぞれの決意を胸に、新たな道への一步を踏み

出します。医療が凄まじい速度で進歩を遂げる中、私たちが果たすべき役割は益々大きくなっています。卒業生はそれぞれ、医療現場で直接患者さんの支援に当たる道、製薬企業で新たな医薬品の開発を目指す道、行政の立場から総合的な医療の質向上に貢献する道、大学に残り更なる知識の高みを目指す道など、様々な道を選択しました。どのような道に進もうとも、星薬科大学で得た全てのことを糧にし、業界の垣根を越えて協力し合うことで、広く社会に貢献できる人材となれるよう、卒業生一同、今後とも精進して参ります。

今日までご指導下さった先生方、様々な場面で支えて下さった職員の皆様、実務実習・学外体験学習を受け入れて下さった先生方、共に学生生活を過ごした友人、温かく見守り続けてくれた家族、お世話になりました全ての方々に、心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、皆様のご健勝と星薬科大学の更なる発展を願い、答辞とさせていただきます。

卒業生代表
杉野 来実

2025年度 入学式の挙行



2025年度星薬科大学並びに星薬科大学大学院入学式を4月5日(土)に本館メインホールにて執り行いました。満開の桜の下、最初は慣れないスーツ姿で少々緊張した面持ちだった新入生たち。しかし、時間が経つにつれて、彼らの表情は星薬科大学での新生活への期待と喜びに輝き始めました。

入学式は、エトワール・アンサンブル部による演奏で開始され、「国歌演奏」の後、牛島学長より新

入生に対し告辞が述べられました。

学部生289名、博士課程薬学専攻8名、博士課程総合薬科学専攻4名、修士課程総合薬科学専攻12名の代表者から入学生宣誓が行われ、新入生の初々しくも凛とした姿を見ることができました。

その後、理事長式辞が述べられ、来賓祝辞に続いて、来賓、役員が紹介されました。在学生代表歓迎の辞が述べられた後、大学役職者

紹介があり、有志による「校歌合唱」で式典は終了しました。

入学式後、新入生・保護者と指導教員で行われる指導グループ懇談会が実施され、新入生と指導グループ・指導教員が顔をあわせ、これからの大学生活等についての説明を行いました。翌日から始まる学生生活にむけた最初の一步となる1日を、無事に終了いたしました。

(総務部)



2025年度 入学式 理事長式辞

学校法人星薬科大学 理事長 大谷 卓男



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。また、大学院に進まれ、さらなる学びを志された皆さんにも心よりお祝い申し上げます。学校法人を代表して、皆さんの入学を歓迎いたします。そして、本日ご列席のご家族の皆様にも、深く感謝とお祝いを申し上げます。皆さんは大変な努力を重ねて、今日という日を迎えられました。その経験に誇りを持ち、ご家族への感謝もぜひ言葉で伝えてください。

入学時には、多くの方が本学の創設者・星一先生の銅像の前で写真を撮られたかと思います。その写真は、振り返れば貴重な一枚となるでしょう。ぜひご家族にも見

せてあげてください。さて、ここで本学の建学の精神について、改めてお話ししたいと思います。創設者・星一先生は明治時代にアメリカで学び、1911年に星製薬株式会社を設立し、その教育部門が現在の星薬科大学の起源となりました。星先生が掲げた理念は、今も色あせることなく私たちに語りかけてくれます。「本当の人をつくる」「親切第一」「努力なき人生に栄光なし」「科学なき人生に栄光なし」「世界に奉仕する人材を育てる」これは単なる言葉ではなく、人生をどう生きるか、どのように人と関わり、学び、働いていくかを示す道しるべです。皆さんには、これらの理念を胸に、立派な人間として成長してほしいと願ってい

ます。人にも自分にも優しく、何事にも丁寧に向き合える人になってほしい。努力を惜しまず、学びを通じて人の役に立つ力を育ててほしい。そして、日本だけでなく、世界を見据えて行動できる人になってください。学位取得や国家試験合格は大切な節目ではありますが、それが目的の達成ではありません。その先にある「社会への貢献」こそが、本当の目標です。学びは楽しいものです。若い今だからこそ得られる知識や経験を、どうか存分に吸収してください。

大学生活では、うまくいかないことや迷うこともあるでしょう。しかし、それらもまた皆さんを成長させる大切な時間です。焦らず、自分のペースで一步一步進んでください。皆さんのそばには、応援してくれる先生や仲間がいます。本学の教職員一同も、全力で皆さんをサポートしますので、安心して学びに向き合ってください。大学院へ進まれる方々も、どうかその学びを深め、世界を広げてください。学問は本当に面白いものです。どうかそれを実感し、情熱をもって取り組んでいただきたいと思います。最後に、今日という人生の新たな門出を、心よりお祝い申し上げます。ご入学、誠におめでとうございます。

2025年度 入学式 学長告辞

星薬科大学 学長 牛島 俊和



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。本年も競争率が高く、見事突破されたこと、心からお祝い申し上げます。同時に、長年にわたり、ご子息・ご息女を支えてこられました保護者の皆さまにも、心からお祝いを申し上げます。

本年度は、薬学部薬学科267名、創薬科学科22名、修士課程12名、博士課程12名(薬学専攻8名、薬科学専攻4名)の方をお迎えすることができました。

学部生の皆さん、改めましておめでとうございます！皆さんは何を目指して本学に入学してくださいだったのでしょうか。「薬剤師です！」「一流の会社に入ることです！」と色々あるでしょう。でも、正しくは「患者さんや仲間から頼られる薬剤師」「活躍する企業人」ですよね。博士課程の皆さんも、学位が目的ではなく、学位を使って世界で活躍することですね。

そもそも、本学の創立者であり、星新一のお父さんでもある星一先

生は、「日本は世界一の製薬国になりうる国、薬は文化の母、世界に供給していく事が日本の文化的使命」という強いお考えのもとに、1911年、星製薬株式会社の中に教育部門を設置しました。その教育部門が発展して、星薬科大学になったわけです。ですから、皆さんの目標も、国試合格や就職だけではなく、その先を見据えて、より高いものにして頂きたいと思えます。

戸越からの桜綺麗でしたよね。では銀杏の木はどうだったでしょうか？既に芽吹いていたのに気付きましたか。これは珍しいことなのですが、あとしばらくすると綺麗な新緑になると思います。銀杏の芽ならよいですが、同じことが、食品の分析だったらどうでしょうか？例の紅麴、ちゃんと異常な物質があるよという分析データがあるのに気付かなかった、だから大変なことになったということが公表されています。食品や医薬品の安全性というのは薬学部の卒業生が大きな力を発揮しているところです。

去年はアルツハイマー病の donanemab という薬がアメリカで承認されました。その前に lecanemab という薬も承認されています。アルツハイマー病の初期も「今朝何を食べたか忘れる」「親しい人の名前を思い出せない」などです。これも気づいて、アルコールの過剰摂取やビタミン不足を避けるなど進行を遅らせるようにしなくてはなりません。これも薬学部出身者の重要な仕事です。

人間の体のほぼ全ての細胞は同じ遺伝子をもっています。でも、なぜ皮膚とか神経とか胃とか違う細胞ができるのか、それを不思議だと思った人がいるので、私の専門とするエピジェネティクスという学問ができました。

目の前にあるのに気付かないこと「視れども見えず」と言います。星薬科大学の仲間になった皆さんには、是非、「見えなくても見れる」力をつけて頂きたいと思えます。それが「自己に親切であれ」という星一先生の言葉です。本日ここにいる教職員は、皆さんがその力をつけることを、研究室で、講義で、サークルで、一生懸命応援します。

そして「見れる」力が身につけば、自然と家族や周囲の友人の力にもなれます。早期発見・早期治療のお手伝い、ができます。

それでは、力をつけるコツは何でしょうか？何でも一生懸命やること、色々な興味をもつことが大切です。幸い、若い人は色々なことを身に付ける力が非常に高いです。難しい言葉でいうと可塑性が高いです。神経細胞回路の活動性はまだまだ高くできますので、たくさん覚えられます。皆さんは覚

え方も上手なはずです。神経のみならず、筋肉の細胞など色々な細胞がまだ変われます。学生の間思いっきり勉強をして、体と心を鍛えてください。一生懸命にやることは周りの人を感動させて、もっと教えて貰えます。そして、皆さん自身の、豊かな、エキサイティングな、または、安定した、人生を適えてくれるはずです。

さきほどの銀杏、星一先生の像の傍の銀杏は芽吹いていますが、

まだ全く芽吹いていない木もあります。生物の集団には、必ず、多数から外れる個体が混じります。外れるのが幸いするケースは実は多くて、少々違った個体がいるからこそ、環境が変わったときにある種が生き延びられることは生命の歴史が証明しています。ダーウィンも「生き残るのは、最も強いものでも賢いものでもない、もっとも適応するものだ」と言っています。たまには辛いときがあるかもしれませんが、それでよいの

です。辛いときは先生や友達に相談してください。

皆さんは、本学の入学試験を乗り越えた優秀な学力、高いポテンシャル、そして若者の高い可塑性をお持ちです。皆さんが4年後、6年後、見えなくても見れる力を付けてくださった姿を楽しみに想像して、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

2025年度 入学式 入学生 宣誓



暖かく、春の訪れを感じるこのよき日に、念願叶い、伝統と歴史

のある星薬科大学に入学できることを、心より嬉しく誇りに感じております。

入学の上は、日々の努力を忘ることなく精進し、「本学は、薬学を通じて、世界に奉仕する人材育成の揺籃である」という建学の精神を忘れず、学則を遵守し、本学の学生として自信と誇りを持って、薬学に関する専門知識・技能・態

度を正しく学んでいきます。

そして、親切第一の精神を胸に、命と健康に貢献できる人材となるべく、これから学生生活を共にする仲間たちとともに、輝かしい未来に向かって、成長し続けることをここに誓います。

新入生代表
安間 咲直

2025年度 入学式 在学生代表 歓迎の辞



桜の花が優しく咲き誇り、穏やかな春の陽ざしを感じる季節となりました。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。また、これまで皆さんを支えてこられたご家族や関係者の皆様にも、心よりお祝い申し上げます。こうして晴れやかな皆さんの姿を目にし、在学生を代表してこの場でご挨拶できることを大変うれしく、光栄に思います。

本日からは皆さんは、星薬科大学の一員となります。期待に胸を膨らませている方もいれば、新しい環境に不安を感じている方もいるかもしれません。しかし、本学には、困ったときに相談できる先生方や職員の方々、そして頼れる先

輩や仲間がたくさんいます。困った時には一人で悩まず、ぜひ相談してください。きっと皆さんの力になってくれるはずです。

さて、これから皆さんが学ぶ薬学は人の命に関わる学問です。生命科学や食、環境衛生など幅広い分野にわたり、高校までの学びを基に、さらに専門的で深い知識を学んでいきます。時にはその過程で困難に直面することもあるかもしれませんが、それを乗り越えた時の喜びや達成感、何者にも代えがたい素晴らしいものです。

本学には、多様な研究室があり、3年次からは研究室での研究活動が始まります。例えば、医薬品の開発を目指す研究、病気の仕組みを解明する研究など、最先端の知識に触れながら学べる機会が豊富にあります。自分の興味を追求し、積極的に研究に取り組むことで、知識の幅が広がります。ぜひ、自分の興味のある分野を見つけ、積極的に研究に挑戦してみてください。

また、本学ではクラブ活動も盛んに行われています。授業や研究

と並行して、仲間と共に活動することで、かけがえのない経験や思い出を作ることができます。実際に、クラブ活動のつながりが将来の仕事に役立ったという先輩の話もあります。ぜひ興味のあることに挑戦し、充実した学生生活を送ってください。

これから始まる大学生活は、皆さんにとって大きな成長の機会となるはずです。学び、挑戦し、多くの経験を積み重ねることで、皆さんの将来がより豊かなものになることを願っています。そして、皆さんが素晴らしい学生生活を送り、卒業する際に入学してよかったと思えるような時間を私たち在校生とともに作り上げていきましょう。

改めまして、ご入学おめでとうございます。皆さんのこれからの活躍を心から願い、歓迎の言葉とさせていただきます。

在校生代表
西 咲良

2025年度 創立記念式典の挙行



星薬科大学は、今年で創立114周年を迎え、5月15日に創立記念式典が挙行されました。記念式典は午後1時30分より、本館メインホールにて行われ、大学役員、教職員、大学院生、学部学生の皆様にご列席をいただき、牛島学長挨拶に続き、様々な表彰が行われ、表彰の後、杉山学長補佐より2024年度の事業等について報告が行われました。

創立記念式典において、次の表彰が行われました。

(永年勤続者表彰)

永年、本学に勤務された伊藤里恵氏、武田尚氏、森田博史氏、岩崎雄介氏、奥輝明氏、高橋万紀氏、内田順也氏に対し、永年の精励を表彰いたしました。

(大谷孝吉記念賞授与)

大谷孝吉記念賞は、本学名誉理事長・故大谷幸吉氏から寄せられた奨学寄附金を基に、1998年に大谷記念研究助成金として制定され

ました。故大谷孝吉名誉理事長の功績を顕彰することを目的として、2025年度(令和7年度)より名称が変更されました。本年は、教員2名に研究奨励金が授与されました。

(テーオーシー・大谷奨学生表彰)

本奨学制度は、本学理事長・大谷卓男氏が代表取締役を務める株式会社テーオーシー及び株式会社オオタニ・ファンドから寄せられた奨学寄附金を基に、学術研究の推進と産業界に貢献する人材を育成することを目的として、制定されました。本年は5名の大学院生諸君がその栄に浴しました。

(特別奨学生表彰)

星薬科大学特別奨学生は、学業及び人物優秀な学生を特別奨学生として選考、表彰するものです。今回は50名の諸君がその栄に浴しました。

(個人からの寄附、企業等からの奨

学金の紹介)

昭和39年度卒業生の藤山宏子(ふじやまひろこ)様からいただいた寄附金を基に、将来医療に貢献する人材を育成すること及び、経済的に困窮する学生を支援することを目的として、「藤山宏子奨学金」を2022年度に設置いたしました。本奨学金は毎年1名に対し返済義務の無い奨学金を給付する制度です。

式典の後、創立記念講演として、野村幸世教授(医療薬学研究室)から「がんの早期発見、がんは治る！万一の場合も… ～がんと付き合い方～」と題する講演が行われました。

(総務部)

2025年度 創立記念式典 挨拶

学校法人星薬科大学 理事 神野 英毅



本日、本講堂において、星薬科大学創立記念式典を開催するにあたり、大谷理事長先生の代理として、一言ご挨拶を申し上げます。私は本学の理事として長く教学に携わっている神野英毅と申します。

まず、創立記念日を迎えるにあたり、本学の創立者・学祖である星一先生に、本学を代表し、また、ご臨席を賜っているご来賓の皆様、本学教職員、学生の皆様とともに感謝と尊敬の念を捧げたいと存じます。創立114周年おめでとうございます。

一口に114年と申しますが、その歴史を申し上げますと、本学は1911年(明治44年)に星製薬株式会社の内教育部門として産声を上げており、その10年後の1922年(大正11年)に星製薬商業学校として、この荏原の地に開校しております。さらに、大戦後の混乱期に星製薬株式会社の社長に就任され、のちに本学の理事長を務められた大谷米太郎氏が研究施設や薬草園等を整備され、今日の発展に至っております。

今まさに皆様の着席されている

本日の式場の本館は、星製薬株式会社の設立10周年を記念して、星製薬商業学校の大講堂として竣工し、本年は100年を超える節目にあたります。その間、関東大震災、東京大空襲を耐え抜き、現在に至っております。

本講堂の設計者は、チェコ・プラハ工科大学出身のアントニン・レイモンドです。東京でも初期の鉄筋コンクリートであり、その精緻な美しいデザインから「近代日本の名建築」に指定されています。なお、このドーム屋根を有する本館デザインは、当時海外に目を向けた星一先生が若き日に学んだアメリカ・ニューヨーク州のコロンビア大学のロー記念ホールに原型があり、先生の大学教育に対する熱き思いを今に伝えております。

本日は記念式典でございますので、星一先生の考え方・モットーを説明いたします。皆様よくご存知の「親切第一」であります。先生は単なる親切ではなく、英語のsincerity一すなわち「誠意」の意味で使われ、「自己にも」「学問にも」「金銭にも」誠意をもって接することの大切さを説き、「誠意・誠実に敵はなく、世界を征服する」と教えられています。

先生は著書でも「自己に誠実になれ」「自己の健康にも誠実になれ」というモットーを説いており、人の健康を守る目的で星製薬株式会社を設立され、その教育・研究部門を皆様の学問・研究の場である星薬科大学まで発展させ、それが本学の礎として、皆様がここにいらっしゃるわけでありま

す。先生のご考えは、本学の建学の精神にも表れております。「本学は、薬学を通じて、世界に奉仕する人材育成の揺籃である」の言葉です。

さて、時代は変化し、現在日本は世界にかつてない長寿化の社会を迎えて、健康が喫緊の課題となっております。また、昨今の感染症・がん疾患・アルツハイマー病・地球環境等々、皆様が世界で協力して解決すべき問題も山積しています。本学で薬学を学ばれた皆様が星一先生のグローバルズムを通じて日本国内のみならず国際人として学問・研究活動を推進されることを願っております。

その一例として、本年、本学博士課程に在籍される総合薬科学専攻の森友紀さんが日本学術振興会において、優れた研究能力を有する学生として特別研究員に選ばれております。おめでとうございます。その功績を称えるとともに、ご指導された先生方に深く敬意を表します。

最後になりましたが、本学の創立以来長い年月を支えて来られた多くの教員と職員の皆様、そして本学を現在の地位に高めていただいた諸先輩、何よりも本学を卒業され、社会で活躍されている皆様に厚く御礼申し上げます。

最後に、私共一同、本学の更なる発展に向け、なお一層邁進しようではありませんか。

以上をもちまして、創立記念日のご挨拶といたします。

2025年度 創立記念式典 学長挨拶

星薬科大学 学長 牛島 俊和



本日、114年目の創立記念日を、教職員、関係者の皆様とご一緒に祝うことが出来ますことを、大変に嬉しく思います。

さきほど、本学の歴史については神野理事から詳しくご紹介がありました。星一先生は、伊藤博文、新渡戸稲造、後藤新平、野口英世などと親交が深く、星製薬株式会社を東洋一の製薬会社に育て、高い志をもたれて人材育成を始められました。しかし、実は、1925年以降、官庁との対立からコカインの製造ができなくなり、星製薬の経営が傾きました。戦後は極度の経営不振となったのを救ったのが現理事長のお祖父様に当たる大谷米太郎氏となります。1950年には星薬科大学となり、安定して現在に至っています。

この間、諸先輩方は「親切第一」の実践に努められ、多くの人材を輩出してきました。大きなドラッグストアチェーンを作った方もおられますし、議員や公務員として国のためにご活躍中の方もおられます。しかし、私がかつとも感激していますのは、見識が高いなーと思っていた薬剤部長が星薬出身であり、薬局でテキパキと薬の説明をしている薬剤師さんが星薬出身であったり、国際会議で格好良く発言している研究者が星薬出身であったり、随所で本学出身者が活躍していることです。

在校生の皆さんには、このよう

な卒業生の方に交じって伝統を繋いで行って頂きたいと思います。そのためには、親切第一を理解した上で、アンテナを高く、時代を捉え、力をつけて頂きたいと思います。

例えば、私、2週間程前にアメリカの癌学会AACRというのに行きまして。Experimental Therapeuticsのセッションはどこも満員で、antibody drug conjugate (ADC) の演題は全7000演題のうち450題、PROTACも82題ありました。そこで感じることは、創薬の流れは大きく動いていることです。本学創立の頃、薬の重要な部分は抽出や精製にありました。本学の創始者星一先生もアヘンからモルヒネを精製する東洋随一の技術をもたれていました。その後、様々な薬剤の合成が大事になり、分子標的薬がでてきて、今は“undruggableがdruggable”というのを感じます。今までは薬を創ることができないと思われていた分子が今は標的になってきています。

大きな時代の流れとして、AIが入って来ています。試験問題もAIでポリッシュして作ります。先生方よりも凄いいAIを使って試験をクリアすれば、それは凄いいことです。創薬の分子設計にもAIが既に入っています。大学の事務も、会議をした後の議事要録をAIで作成し始めています。AIを使いこなして、より創造的なことに時間を使う、そのような薬剤師・研究者になって頂きたいです。

薬学部の使命として、薬を創ることに加えて、適確に使える薬剤師を輩出することも重要です。昔前は、頭痛にはアスピリン、肺炎にはペニシリンでした。今は、同じ乳がんでも、HER2陽性の乳がん患者さんにはトラスツズマブ、ER陽性にはエストロゲン拮抗薬といった個別化医療・ゲノム医

療の時代です。副作用の発見も重要な仕事です。間質性肺炎、自己免疫疾患のような症状、薬剤師が気付くことで重症化が防げます。どんな副作用があるのか、その具体的な症状を知っていることが重要です。さらに、薬剤師の仕事には、国民の健康を守るということもあります。機能性表示食品や特定保健用食品が本当に効果があるのか見極める力も重要です。

さて、在校生の皆様にも力をつけて頂くために、大学も日々進化しています。昨年度は、臨床力をつけて頂くために野村教授の医療薬学研究室が発足しました。またモノからヒトへの流れを先取りして、横田講師の医療コミュニケーション学研究室も発足しました。さらに、AIやビッグデータを扱える人材育成のために、児玉教授の医療データサイエンス研究室も発足しました。今年度は、紅麹などの問題をおこさないために、小川教授にお越し頂き毒性学研究室が発足しました。また、実務教育研究部門を3研究室化し、効率よく教育・研究を行い、力を合わせて実務実習にご対応頂ける体制となりました。

徐々に成果も上がっています。大変に名誉な学術振興会のDCに2024年は2名、2025年は1名採用されています。科学研究費も、国立大学を含めた全国の平均採択率が27.3%のところ、本学は32%となっています。学生さんの就職も順調で、受験者数も伸び続けています。

そのような中、変わる時代に適応しながら、伝統をつなぐのは、今ここにおられる学生諸君です。時代を創る人、回りから尊敬される人に是非なってください。そのために、大いに勉強し、大いに考え、大いにチャレンジをして頂くことを期待して、本日の挨拶とさせていただきます。

2025年度 創立記念式典 学長補佐報告 ～2024年度の事業概要について～

星薬科大学 学長補佐 杉山 清



2024年度に実施した主な学事、イベント、事業についてご報告いたします。

【学事・イベント】

1. 2024年度星薬科大学並びに星薬科大学大学院入学式

新入生は、薬学部薬学科276名、創薬科学科22名、大学院薬学研究科 総合薬科学専攻 修士課程17名、博士課程2名、薬学専攻 博士課程4名でした。

2. 公開講座(薬草見学会)

5月25日と11月16日に公開講座(薬草見学会)を実施しました。主に、ミニ講義と薬用植物園の見学の2部構成で、漢方研究部による薬用植物解説、アロマテラピー研究会、生協学生委員会によるアトラクション等が行われました。

3. 公開講座(先端科学創造シンポジウム)

5月16日に品川区との共催で先端科学創造シンポジウムを開催いたしました。本シンポジウムは、区民の皆様方が学生と一緒に講演

を聴講する形式で開催しております。

4. 公開講座(For the Kids)

2024年度の新しい試みとして、小学生を対象にFor the Kidsと称するイベントを立正大学との共催、品川区の後援により11月2日及び9日に開催いたしました。立正大学の教員による授業の後、生の薬を使った染め物を体験するワークショップ等が行われました。当日は小学生と保護者が50組ほど参加いたしました。授業やワークショップを通じて、子どもたちに薬用植物への関心を育む機会を提供いたしました。

5. オープンキャンパスの開催

来場型オープンキャンパスは、8月2日及び3日の2日間、開催しました。学生によるキャンパスツアー、学生フリートーク、ミニ講義、薬剤師体験などを行いました。2日間で、2,231組、4,268名の参加がありました。

また、Web型オープンキャンパスをホームページ上で公開し、ガ

イダンスやミニ講義の動画を公開いたしました。

6. 第52回星薬祭の開催

第52回星薬祭を10月26日、27日に対面形式で開催しました。テーマは「Sparkle(スパークル)」でした。このテーマには、参加する一人一人が自らの個性を発揮し、来ていただいた人達に楽しんでもらうことで、参加者全員が輝けるよさという意味が込められているようです。星薬祭実行委員会を中心とした関係者の努力により、成功裏に終わりました。

7. 2024年度学位記授与式の挙

2024年度学位記授与式を3月15日にメインホールで挙行了しました。学部卒業生は、薬学科254名、創薬科学科26名でした。

大学院修了者は、課程博士は、薬学専攻1名、総合薬科学専攻1名、課程外博士3名、修士課程11名でした。

【事業】**1. 第110回薬剤師国家試験・就職**

本学は、新卒受験者254名の内、合格者224名、合格率約88%、私立56大学中20位でした。

2024年度卒業生の就職率は、例年どおり100%に近い数字でした。創薬科学科については、卒業生の80%が大学院に進学しますが、就職を希望する学生の就職率は100%でした。

薬学科は、ドラッグストア、薬局及び病院で、全体の約8割程度を占めています。

2. 国際学術交流

2023年度は、新型コロナウイルスの感染状況の改善を受けて、国際学術交流協定校との活動も活発に行われました。2024年度は、主に、アイルランド王立外科医学院

(アイルランド)、パシフィック大学(アメリカ)、ヴェルツブルク大学(ドイツ)、浙江工業大学(中国)、チュラロンコーン大学(タイ)の5大学と交換留学、海外実務研修等の活動が行われました。

3. 新カリキュラムの開始

2024年度入学者から適用される改訂薬学教育モデルコアカリキュラムに対応し、新カリキュラムの実施を開始いたしました。1,2年次にはキャリアデザインの授業を導入し、学生が早期から自身のキャリアについて考えることで、将来に必要な能力を段階的に、かつ着実に身に着けるように配慮いたしました。

4. 新研究室の発足

医療薬学研究室、医療コミュニ

ケーション学研究室、医療データサイエンス研究室が発足いたしました。また、低学年からの薬学教育の質的向上及び研究力の育成を目的として、新たに基礎薬学教育研究部門を設置することを決定いたしました。

5. パソコン室の改修

パソコン室をアクティブラーニング対応型に改修いたしました。可動式の机及び椅子への変更、大型モニターの設定により、グループワークや発表を行う授業に対応が可能となりました。なお、パソコン室の名称は学内におけるアンケートの実施を行い、HAL (Hoshi Active Learning) と決定いたしました。

2025年度 創立記念式典記念講演 がんの早期発見、がんは治る! 万一の場合も… ～がんとのかき合い方～

〈講師〉

星薬科大学 医療薬学研究室 教授
野村 幸世 先生



2025年5月15日(木)、本館メインホールにて品川区との共催による星薬科大学公開講座「先端科学創造シンポジウム」講演会シリーズ<25>として、星薬科大学医療薬学研究室の野村幸世教授に「がんの早期発見、がんは治る! 万一の場合も… ～がんとのかき合い方～」をテーマにご講演いただきました。品川区民の皆様をはじめ、学部生、大学院生、本学関係者が拝聴いたしました。

ご講演では、私たちの体は異常細胞を修復・排除する機能を持つが、これが働かずに増殖した塊が「がん」とであると語られました。がんの主な原因は、細菌・ウイルスの感染、生活習慣、遺伝的要因の3つに大別されること、男性では喫煙が、女性では感染が最も多い原因であると紹介されました。細胞分裂の総回数が増え、修復機能が低下することから、長生きもがんの原因の一つであり、がんは「誰もがなり得る病気」と強調されました。

日本のがんの現状として、2人に

1人ががんになり、3人に1人ががんで亡くなっていると説明されました。がんになる割合は50歳前後から増加すると語られ、男性の罹患率が高いものの、20代から50代前半では乳がんや子宮頸がんなど女性特有のがんが多いことから、女性の割合が多くなると解説されました。また、がんは細胞分裂する全ての臓器に発生し得ると述べられました。

がんの早期発見には検診が極めて重要であると強調され、がんは小さいうちは自覚症状がほとんどなく、症状が出る頃には進行していることが多いと述べられました。検診で見つければ95%が治るとされる一方、自覚症状が出てからの治療では治癒率が約半分になると説明されました。個人の家族歴や背景に応じた検診の頻度や内容の個別化が大切であり、信頼できるかかりつけ医を持つことが強く推奨されました。また、がん予防には、望ましい生活習慣(禁煙、節度ある飲酒、適正体重維持、適度な運動、バランスの取れた食事)が不

可欠であると説かれました。

がんの治療法は主に「手術、放射線治療、化学療法(抗がん剤)」の3つであると説明されました。近年では体への負担が少ない手術法や、通院で可能な抗がん剤治療も増えており、治療選択においては、インフォームドチョイス(十分な説明を受けた上での患者自身の選択)やセカンドオピニオンが重要であると語られました。がんの5年生存率向上には、分子標的治療薬や免疫チェックポイント阻害剤といった新しい薬剤の目覚ましい進歩が大きく寄与しており、新薬開発は非常に長い道のりを要する努力の結晶であると強調されました。

がん治療は身体的苦痛に加え、精神的・経済的問題も伴うと説明されました。そのため、「がん相談支援センター」や「緩和ケア」が重要な役割を担うと紹介されました。緩和ケアは診断時から介入が推奨され、患者とその家族の心身の痛みを和らげ、生活の質向上と生存期間延長に寄与すると述べられました。がんは医師だけでなく、多職種が連携するチーム医療で支えられ、社会としては、患者を責めたり過剰に同情したりせず、がんと患者を正しく理解し、生活を支援する環境づくりが望まれると語られました。

本講演は、公開講座として、医療・薬学に関連するテーマとして開催いたしました。区民の皆様のご生活に直結するテーマで開催できたことは、地域と共に歩む薬科大学として、大変喜ばしいことでした。

(総務部)

第110回薬剤師国家試験について

薬学教育研究部門 部門長 山崎 正博

第110回薬剤師国家試験の概要について

薬剤師国家試験の傾向は、出願者数、受験者数、合格者数、及び合格率の各区分を指標として評価することができます。過去5年間(第106～110回)の薬剤師国家試験の総合結果(全国)を表1に示します。2024年度(第110回薬剤師国家試験)は、過去の薬剤師国家試験と比較して各区分の値に大きな変動は見られず、合格者は9千から1万人未満の水準で、合格率は概ね68～69%で推移をしています。例年、出願者数に比べ実際受験した受験率が約10%程度少ないことが問題となっていますが、第110回においても受験率の傾向は変わりませんでした。

新卒者の成績についても、110回薬剤師国家試験の各区分、受験率(87.7%)に大きな変動はみられず、新卒者の合格率は例年程度の84.96%でした。(表2)。

このように、受験者数や合格者数など概要的な面では、新型コロナウイルス感染症などの社会的な影響は特に見られず、例年通りでした。また、出題された問題の難易度等については、易化が取りただされた第108回(合格者得点率68%前後)に比べ、ほぼ例年と同水準(60%前後)に戻ったとされております。

本学における第110回薬剤師国家試験の成績について

本学の薬剤師国家試験における成績を表3～5に示します。第110回薬剤師国家試験における本学の受験率は92.7%であり、私立大学(86.5%)、全大学(87.7%)よりも高い値となりました(表3)。この高い受験率は、後述する本学のストレート合格率にも寄与しております(図1)。本学の既卒者を含めた総合成績における合格率は、82.73%であり、この数年間の平均

表1 5年間の薬剤師国家試験における総合の結果(全国)

区分	第106回	第107回	第108回	第109回	第110回
出願者	15,680名	15,609名	15,334名	15,118名	14,825名
受験者	14,031名 (89.5%)	14,124名 (90.5%)	13,915名 (90.7%)	13,585名 (89.9%)	13,310名 (89.8%)
合格者	9,634名	9,607名	9,602名	9,296名	9,164名
合格率	68.66%	68.02%	69.00%	68.43%	68.85%

表2 5年間の薬剤師国家試験における新卒者の結果(全国)

区分	第106回	第107回	第108回	第109回	第110回
出願者	9,983名	9,726名	9,595名	9,582名	9,191名
受験者	8,711名 (87.3%)	8,665名 (89.1%)	8,548名 (89.1%)	8,416名 (87.8%)	8,061名 (87.7%)
合格者	7,452名	7,386名	7,254名	7,100名	6,849名
合格率	85.55%	85.24%	84.86%	84.36%	84.96%

表3 薬剤師国家試験全体における新卒者の成績(第110回)

区分	全体	私立大学	星薬科大学
出願者	9,191名	8,280名	274名
受験者	8,061名(87.7%)	7,164名(86.5%)	254名(92.7%)
合格者	6,849名	6,045名	224名
合格率	84.96%	84.38%	88.19%

表4 5年間の本学総合(新卒者+既卒者)の成績(第105～110回)

区分	第106回	第107回	第108回	第109回	第110回
出願者	337名	343名	334名	343名	354名
受験者	314名 (93.2%)	317名 (92.4%)	300名 (89.8%)	320名 (93.3%)	330名 (93.2%)
合格者	279名	261名	255名	258名	273名
合格率	88.85%	82.33%	85.00%	80.63%	82.73%

表5 本学新卒者の成績(第105～110回)

区分	第106回	第107回	第108回	第109回	第110回
出願者	281名	284名	263名	267名	274名
受験者	262名 (93.2%)	263名 (92.6%)	233名 (88.5%)	246名 (92.1%)	254名 (92.7%)
合格者	247名	231名	211名	214名	224名
合格率	94.27%	87.83%	90.56%	86.99%	88.19%

程度の値となりました(表4)。本学は、私立56大学中11位、国公立大学を含めた74大学中では20位の成績でありました。

また、第110回薬剤師国家試験における本学新卒者の合格率は、88.19%でした(表5)。本学の新卒合格率は、私立56大学中20位、全

74大学中では33位でありました。

図1に、本学の第100回から110回までの薬剤師国家試験の入学者に対する合格者数(ストレート合格率)の推移を示します。薬剤師国家試験における“ストレート合格”とは、薬学部を修業年限の6年間で卒業する者が、6年次に薬剤師

ストレート合格率推移

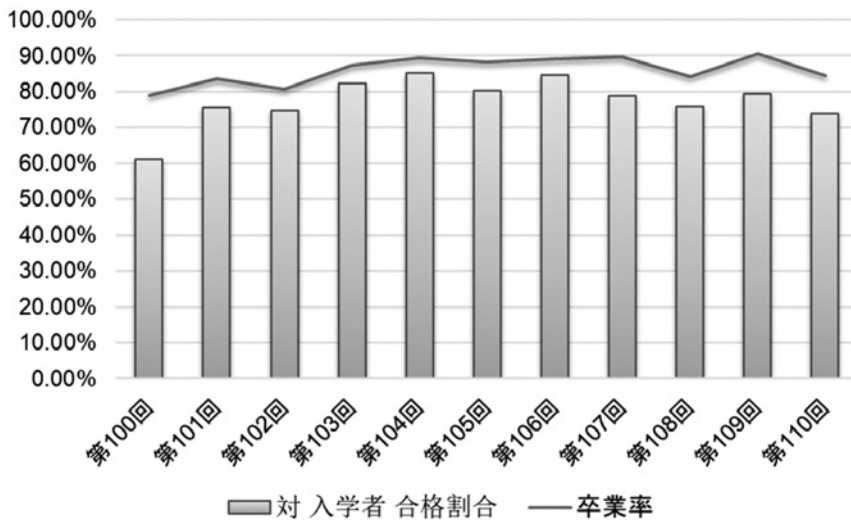


図1 第100回～110回 国家試験合格率(入学者比)及び卒業率

国家試験に合格した場合を指します。本学のストレート合格率はこの10年で向上しており、全国で1位となった第106回を含め、ここ5年は概ね8割前後で推移しております。第110回は、昨年度より卒業率がやや減少し84.4%に、それに伴いストレート合格率は73.8%と昨年度より微減しました。一方、表3～5に示しましたように、総合的な国家試験合格率は昨年よりポイント・大学別順位とも上昇して

おります。第111回以降に向けて、本学のストレート合格率と総合合格率を高い水準で両立させることが課題となっております。

第111回薬剤師国家試験に向けて

ストレート合格率を高いレベルで維持しつつ国家試験合格率を向上するためには、国家試験の難易度や、周囲・本人の状況に左右されない、骨太な実力を持つ卒業生を送り出すことが必要でありま

す。本学では、昨年度より6年生後期を中心に国家試験対策のコマ数と講義時間を増やし、1週間・1か月などの区切りごとに定期的な演習テストや模擬試験を繰り返し行うことで、大学側だけでなく学生が自身でもリアルタイムに実力確認できる体制を整えております。また、低学年時から各種薬学演習を実施し、早い段階からより効率的な学習支援ができるように配慮しております。さらに、卒業までの過程で留年をしている学生(年次外者)や、卒業延期あるいは薬剤師国家試験不合格となった学生についても、個別指導を含めた学習支援を今後も行っていまいります。

薬学教育研究部門では、蓄積してきたデータに基づいた継続的且つきめ細かな指導を実践してまいります。

以上、第110回薬剤師国家試験の結果を中心に報告させていただきました。薬学教育研究部門は、引き続き薬剤師国家試験に向けて万全の準備を持って臨む所存ですので、ご協力、ご支援をお願い申し上げます。

2024年度就職内定状況について

学生支援部

2024年度卒業生(2025年4月入社)の就職活動は、2023年5月に新型コロナウイルス感染症が5類に移行して行動制限のない日常が戻り、インターンシップ・会社説明会などを対面で行う企業が大幅に増えた中で行われました。新卒採用市場は、昨年引き続き採用側の意欲が全体的に高く、他社よりも先に選考を開始し早期に内々定を出そうとする企業が増えました。その結果、本学でも政府が定める6月1日の採用選考活動の開始日より前に内々定を得た学生が大半を占めました。

学生支援部では、こうした年々

広まる就職活動の早期化に対応するため、昨年度同様ガイダンスの日程を一部前倒しました。具体的には、年間約20回実施するガイダンスのうち、「グループディスカッション対策ワークショップ(7月上旬開催)」「OBOG交流会(10月中旬開催)」「本選考向けエントリーシート対策講座(11月中旬開催)」をそれぞれ1～2ヶ月前倒しし、早期の準備を支援しました。また、昨年度秋に実施し好評を得た「OBOG交流会」を夏のインターンシップの選考時期(6月上旬)に併せて追加実施し、学生が早期から業界や企業についての理解を深

められるようにしました。

就職内定状況は下表の通りです。全体の進路決定率は99.3%であり、製薬企業では第一三共、中外製薬、アストラゼネカ、ジョンソンエンドジョンソンといった世界屈指の大手製薬企業に内定者を輩出しました。また、病院では例年同様、大学病院を中心に、日本赤十字医療センター、がん研究会有明病院など日本の医療を牽引する病院に多くの内定者を輩出しました。

薬学科(6年制)卒業生においては、病院・保険薬局・ドラッグストアの3業界の合計が74.7%でした。この3業界の占有率は「2021年度

82.6% ⇒ 2022年度79.1% ⇒ 2023年度73.6%」と昨年度同水準となりましたが、近年は緩やかな減少傾向にあります。内訳としては、病院が減少傾向にあり、薬局及びドラッグストアがともに増加傾向です。採用活動の早期化が影響していると考えられます。一方、製薬企業・CROの割合は「2021年度8.3% ⇒ 2022年度12.8% ⇒ 2023年度18.3% ⇒ 2024年度17.4%」と推移しており、コロナ禍を経て、企業の

採用意欲の高まりが伺えます。
創薬科学科(4年制)卒業生については、大学院への進学が57.7%と昨年の80%から大きく減少しましたが、進学者数としては15名(2023年度は16名)と大きく変化はありませんでした。修士課程修了者については、医薬品メーカー・CROの割合が50%でした。
就職活動の早期化は今後もさらに加速していく見込みです。学生支援部では、早期化の中でも学生

一人ひとりが自分の将来としっかり向き合い、自己実現に向け納得度の高い第一歩を選択できるよう、タイムリー且つきめ細やかな支援を実施してまいります。また、キャリアコンサルティングを低学年から実施し、働き先とのミスマッチを防ぎたいと考えております。保護者の皆様ならびに先生方におかれましても、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。
(鈴木 玲弘)

2024年度卒業生 就職内定先
業種別・職種別内訳(秋卒業及び社会人学生を除く)

(2025年3月31日現在)
注: 国家試験後の辞退は加味していません
学生支援部

		内 定 先																就職決定学生数	就職率 %							
		製造販売業										卸売業	ドラッグストア	保険薬局	病院	病院研修生	CRO・SMO			教育・研究	ポストドク	国家公務員	地方公務員	独立行政法人	IT・サービス業	その他
		医薬品					化学等																			
		M R	研究	開発 P V	学術	品質管理	技術総合	営業企画	研究開発	学術	技術総合															
薬6	男	4		1		1					1	27	19	4	1	5			1	2		1		67	100.0%	
	女	5		6	1	2	1	2	1		1	46	51	34	7	18					3		1		179	99.4%
薬学計		9		7	1	2	2	2	1		2	73	70	38	8	23			1	5		2		246	99.6%	
創4	男							2		1												1	2	6	100.0%	
	女															2							2	4	100.0%	
創薬計								2		1						2						1	4	10	100.0%	
M2	男		3							1														4	80.0%	
	女		1													1						1		3	100.0%	
D3	男																							0	—	
	女																							0	—	
D4	男													1										1	100.0%	
	女																							0	—	
大学院計			4							1						1						1		8	88.9%	
総計		9	4	7	1	2	2	4	1	2	2	73	70	39	8	26			1	5	1	3	4	264	99.2%	

		進 学					進学決定学生数	※2		進路未定学生数	進路未定率 %	非就職希望学生数	卒業・修了者数
		大学院	科専履修生	専門学校	留学	医・歯学部		他学部	進路決定学生数				
薬6	男	6					6	73	100.0%		0.0%		73
	女	1					1	180	99.4%	1	0.6%		181
薬学計		7					7	253	99.6%	1	0.4%	0	254
創4	男	6			2		8	14	100.0%		0.0%		14
	女	7					7	11	100.0%		0.0%	1	12
創薬計		13			2		15	25	100.0%	0	0.0%	1	26
M2	男						0	4	80.0%	1	20.0%		5
	女	3					3	6	100.0%		0.0%		6
D3	男						0	0	—		—		0
	女						0	0	—		—		0
D4	男						0	1	100.0%		0.0%		1
	女						0	0	—		—		0
大学院計		3					3	11	91.7%	1	8.3%	0	12
総計		23					25	289	99.3%	2	0.7%	1	292

調査対象学生数 292

[内訳]

薬学6年 254(男73,女181):

創薬4年 26(男14,女12):

M2 11(男5,女6):

D3 0:

D4 1(男1)

※1 就職率 = 就職決定学生数 ÷ (卒業・終了者数 - 進学決定学生数 - 非就職希望学生数)

※2 進路決定率 = (就職決定学生数 + 進学決定学生数) ÷ (卒業・終了者数 - 非就職希望学生数)

基礎薬学教育研究部門について

基礎薬学教育研究部門 部門長 千葉 義彦

基礎薬学教育研究部門は、本年(2025年)4月に設置された新しい部門です。本部門は、1~2年次の学生を主な対象とし、大学での学修を支える基礎学力定着や学習習慣定着を支援することを目的としています。千葉義彦教授(分子生物学研究室)、森友久教授(行動可塑性制御研究室)、竹ノ谷文子准教授(運動科学研究室)の3名の教員を中心に運営を行い、上級年次学生のstudent assistant(SA)によるサポート体制も整備してきました。

薬学教育では専門性の高い学修が求められる一方で、高校までに培われた基礎的学力や自己学修能力が十分に発揮されないまま「つまずきを感じる学生」も少なくありません。本部門では、この「つまずきを感じる学生」が自信をもって大学生活を送れるよう、個別相談や少人数指導、学修計画の立案支援、基礎科目のミニ講義の実施、学修支援教材の作成・提供など、多角的な取り組みを展開しています。

特に注力しているのは、本学初となる2年次学生SAによるピアサポート活動です。年齢の近い先輩による助言や学修のコツの伝授は、学生にとって心理的なハード

ルが低く、質問しやすい環境づくりにもつながっています。SAは、学修上の困難を経験した先輩として、後輩学生に寄り添いながら具体的なアドバイスや励ましを提供しており、学修への主体的な取り組みを促すうえで有効に機能しています。当初は「つまずきを感じる学生」を対象学生として支援を行ってきましたが、ピアサポート活動の噂を耳にした対象外の学生も自主的に参加するなど、予想外の効果も現れました。2年次学生SAによるピアサポート活動の一

環として、全1年生を対象とした「自由質問コーナー」も開設しました。多くの皆さんにご活用いただけたら幸いです。

上述の通り、本部門は新しい部門です。今後、試行錯誤を繰り返しながら、学生の主体的な学びを促す取り組みを継続・拡充していく予定です。基礎からの支援を通じて、学生一人ひとりが持つ可能性を最大限に引き出すことを目指します。すべての学生の明るい未来につながるよう、部門教員一同、今後も一層尽力してまいります。

【新1年生の皆さんへ】

自由質問コーナーを設置します！

開催日： 5/2(金)より、**毎週金曜日** (最終7/4予定)

開催時間： 16:45 ~

開催場所： 302 講義室 (新星館 3F)

相談料： もちろん**無料!**



自由質問コーナー

物理系 化学系 生物系

2年生先輩が、講義の疑問点などに対応します!

自由質問コーナーの案内ポスター。教務部掲示板のほか、デジタルサイネージにも掲載しました。



2年生SA (ピアサポーター：右)による1年生への学習支援の様子



2年生SA (ピアサポーター：中央)による1年生への学習支援の様子

植物園ver. 3.0とは何か(薬用植物園の活動報告)

【植物園の起源は薬草園】

植物園の発端を辿ると中世ヨーロッパの修道院に作られた薬草園に行き着きます。そこでは、古代ローマの医者、薬理学者、本草学者であるディオスコリデスの著したマテリア・メディカに収載された薬用植物が収集・栽培されていたといえます。また、世界初の近代植物園とされるイタリアのピサ大学植物園(1543年)も主に医療を目的として創設されたものです。我が国においても同様で、日本で最初の植物園とされる小石川植物園も小石川御薬園が端緒となっています。大交易時代(大航海時代)を経て、プラントハンターが世界中から収集したさまざまなスパイスや薬用植物、産業用植物や観賞用植物が遺伝資源として保存、研究・開発、利用されるようになりました。

【植物園のバージョンアップ】

薬用植物の収集と保存に端を発する近代植物園ですが、その主な役割は時代と共に移り変わって来ました。私は日本の植物園の歴史を以下に示す3つのバージョン(発達段階)に分けて考えています。もちろん、いずれのバージョンにおいても、基盤には遺伝資源としての植物収集と評価、基礎研究や応

用研究があることは言うまでもありません。

ver. 1.0: 主に病気の治療に用いる薬用植物を収集していた。

ver. 2.0: 第二次大戦後の荒廃した人心に癒しを提供し、やがて華美な花を楽しむ娯楽施設へ発展した。しかし、今世紀に入ってからは娯楽の多様化の影響もあり縮小傾向にある。

ver. 3.0: 新たな役割(特に広い意味での健康機能)が求められるようになり、薬用だけでなく森林浴や「緑の効果」にも注目が集まる(2000年頃～)。

【植物の才能を見出し活用する】

このように、時代によって植物や植物園に求められる役割や使い方は変化し続けて来ましたが、その根底にあって変化しないのは「健康に資する」ということでしょうか。特にここ20年ほどの間で広く社会で関心が高まっているのは「社会的な健康」や

「主観的な健康」ということになるかと思えます。このようなニーズに対応する植物の健康機能(植物の新たな才能)を研究および開発することが求められています。その中で、開校以来80余年の長い歴史を持つ本学薬用植物園は、これら現代の健康ニーズに応えた植物の新たな活用方法を提案し実践する使命を負っているとと言えます。

【実践報告】

この1年間に行なった実践例をいくつか紹介します。

1) 地域貢献の中で

恒例の春と秋の薬草見学会を開催し、昨秋は230名、今春は300名の参加者がありました(写真1、2)。また、昨年11月には、新たな試みとして、本学イノベーションセンターのバック



写真1 春の薬草見学会 生薬学研究室の平澤先生による講演「ナス科の植物のよもやま話 ～おいしく健康に～」



写真2 春の薬草見学会 アロマセラピー研究部によるルームコロン作り体験。他に、漢方研究部による生薬解説、生協学生委員による記念グッズの販売と学内施設案内がありました。

アップの下「しながわ大学連携推進協議会」の会員大学である立正大学と共同で、小学生向けの体験型イベントを2回開催しました。染め物(写真3)やハーブティー(写真4)をテーマとして、親子のコミュニケーションを図る体験プログラムを用意したところ、各回50組100名の募集枠を上回る参加応募があり、事後のアンケート調査で高く評価され、今後の活動に向けて大きな手応えを感じました。

2) 専門家教育の中で

社会的な健康に対応した植物の活用法は未開拓であり、学問として体系化されているわけでもありませんが、職能の拡張領

域としても大きな魅力のある分野になるものと期待されます。そこで、筆者の担当する教養系の講義「有用植物の歴史と応用」では、座学や薬用植物園の植物を用いた体験に加え、受講学生によるコミュニケーションプログラムの立案を課題として取り組ませています。おそらく他大学には無いユニークな講義であり、授業アンケート調査では高い評価を得ています。

【今後の構想】

このような活動について、昨年は日本薬学会の横浜大会に招待され、講演の機会をいただき、今年は日本植物園協会の浜松大会にお

いて紹介する機会に恵まれました。そして、協会の60周年事業として取り組む方針が決定されるなど、少しずつですが植物の持つ新たな健康機能が認知され、大きな流れになって行くことが期待されます。そして、今後も本学薬用植物園が有する遺伝資源としての植物ひとつひとつに新たな才能を見出すと共に、広くウェルビーイングに役立てるための研究を続けます。また、環境省の「体験の機会の場の認定制度」などの公的な認定制度にもチャレンジし、本学薬用植物園の社会的価値を高めていきたいと考えています。



写真3 琉球藍の生葉を用いた染め物体験。葉に含まれるインディゴ前駆体が布の上で見るとブルーに変化する様子を観察することで天然物化学に対する興味を喚起します。また、作品(エコバッグ)を作製することで自己表現や自己肯定感の向上につなげます。



写真4 問診票に基づいて保護者にインタビューし、最適なブレンドをチョイスします。続いてレシピを参照しながら3種類のハーブを混合しハーブティーとして試飲しました。健康をテーマに親子のコミュニケーションを促すプログラムで、本学学生たちがメンターとして関わる機会にもなりました。

オープンキャンパス2025について

入試広報委員長 森田 博史



2025年8月1日(金)・2日(土)にオープンキャンパス2025を開催いたしました。コロナ禍において、WEB形式や規模縮小の形式で開催していたオープンキャンパスは、一昨年2023年度より、教職員や学生スタッフの多大な協力のもと、従来の大規模な形式に戻して開催いたしました。本年は台風の接近が予測され、通常開催が危ぶまれる中でしたが、2024年度とほぼ同水準の4,012名の方にご来場いただきました。

今回は、2025年度の内容について振り返ります。プログラムは、総合ガイダンス&入試ガイダンス、ミニ講義、キャンパスツアー、星薬生とのフリートーク、薬剤師体験、相談コーナー、研究室ポスター展示コーナー、国際交流コー

ナーなどを実施しました。ミニ講義は、田口久美子先生・野村幸世先生にご担当いただきました。また、薬剤師体験では実務教育研究部門の先生方に企画考案から当日の運営までご尽力いただきました。新設されたキャンパスツアー研究室見学コースでも多くの先生方にご助力をいただき、星薬の研究力をご来場の皆さんにお示しいただきました。また、相談コーナー、研究室ポスター展示コーナーにおいても、教職員の皆様にはたくさんの受験生と保護者への説明対応にご協力いただきました。あらためて、皆様には多大なご協力を賜りましたことを御礼申し上げます。

関係者の方はご存知のとおり、大学のオープンキャンパスは、学

生が中心となり運営しております。2025年度においても、幹部学生を中心とした約180名の学生スタッフが、汗を流しながら、先輩後輩の枠を超えて意見を交わし、澁淵とした笑顔で真摯に対応してくれました。

キャンパスツアーでは、本学の施設や雰囲気をよく知ってもらおうと一生懸命説明し、相談コーナーでは自らが受験時に使用していた参考書等を使いながら、参加者に向き合いました。また、どのプログラムに参加しようか困っている参加者には積極的に声をかけました。1日目の終了後、幹部の学生たちは、どうすれば2日目をより良い運営にできるか、来場者に満足してもらえるかの議論を交わし、どの点においても妥協することなく2日目に向けて準備をしてくれました。オープンキャンパスにおいて、多くの場面で、学生スタッフが自ら考え、一生懸命働く姿をご覧いただくことができたかと思えます。創立者星一先生が掲げた「親切第一」「世界に奉仕する人材育成」は、本イベントにおいても存分に発揮されています。

今後も入試広報委員会では、相談会や説明会などの各種イベントを中心に、高校生や保護者の方の心に響く広報活動をしてまいります。学生・教職員の皆様には今後ともご協力をお願いすることがあるかと思いますが、本学の良さを知っていただくためにも、ぜひお力添えいただけると幸いです。



最近の本学の国際交流活動について

国際学術交流委員会委員長 叶 直樹

2025年8月現在、本学は、アジア、欧州、北米の11大学12学部と国際学術交流協定を締結し、学生の交換留学や、教職員の相互訪問、国際共同研究を実施しています。2019年に始まったコロナ禍のため数年間完全停止していた国際交流ですが、2022年に新体制のもと交流を再開し、「世界に奉仕する人材育成の揺籃」たる本学の建学の精神に則って国際交流活動を推進しています。

現在、本学の学部生・大学院生向けには、海外実務研修と海外応用研修という2つのプログラムを実施しています。海外実務研修は、9～11月の間の5～6週間、協定校に滞在して、薬剤師業務に関わる授業や研修を受けるプログラムであり、薬剤師としての実践的な能力の養成を目的としています。対象学年は薬学部5年生であり、現在の派遣先はアイルランド・ダブリンに拠点を置くアイルランド王立外科医学院(RCSI)と、米国オレゴン州に位置するパシフィック大学です。一方、海外応用研修は、約2ヶ月間協定校に滞在して、現地での講義や実習も含めた研究活動を行うプログラムであり、海外における研究活動の体験を主眼としています。対象は薬学科5年生、創薬科学科4年生、および修士課程の学生であり、現在の派遣先は上述のRCSIとタイ・バンコク中心部に立地するチュラロンコーン大学です。これらの派遣に関しては、独立行政法人日本学生支援機構の海外留学支援制度(協定派遣)などを活用し、留学費用の一部の支援も行っています。

本学学生の派遣と共に、留学生の受け入れも実施しています。本学に派遣された留学生は、あらかじめ受け入れを引き受けていただいた研究室に滞在してもらい、研究活動を中心に行うプログラムと

しています。2022年以降に派遣と受け入れを数回実施した結果、本学や現地で友達になった学生間での交流が育ちつつあります。

一方、学生の円滑な交流のためには、本学と協定校の担当者間での密な情報の交換・共有は欠かせません。また、学生の教育・交流のみならず、教職員の交流も本学の国際交流の重要なテーマです。コロナ禍後の2022年には協定校とのオンラインミーティングを開始し、中断していたRCSIとドイツ・デュルツブルグ大学からの教員招聘も再開しました。また、2023年には嘉南薬理大学と浙江工業大学からの表敬訪問、2024年にはパシフィック大学薬学部からの表敬訪

問を受け、相互理解と国際交流の活性化について話し合いました。本学からも、協定校とのネットワークを更に強化するために、2025年1月にチュラロンコーン大学薬学部(写真)と理学部を表敬訪問しました。これら教職員の交流により、異なる国や地域の薬学部の教育・研究活動を学び、それを本学の教育・研究活動へフィードバックできないか検討しています。

国際学術交流委員会ではこれらの活動以外にも様々な活動を行っております。詳細は本学ホームページにて公開しておりますので是非ご覧ください。



第52回星薬祭を開催して

学生支援部長 細江 智夫

第52回星薬祭が10月26日(土)、27日(日)の2日間にわたって開催されました。本年度は「Sparkle」をテーマに掲げました。学生一人一人が、日々忙しい学生生活を送る中で、クラブ活動や研究室活動で培った絆や知性を星薬祭で“Sparkle”させて欲しいという、星薬祭実行委員一同の熱い気持ちとその想いを込められたとのことでした。

実行委員会は、薬学科2年生(当時)の千葉勇征さんを委員長に、200名近い学生で構成されました。各委員が分担ごとに目標を掲げ、昨年の経験や先輩方からの引継ぎを活かして、企画立案に始まり、所轄官庁への各種申請手続き、設営・運営に至るまで、一丸となっ

て準備を進めてきました。

今年度も昨年に続いて一般公開を実施したところ、予想を超える多くの来場者をお迎えすることができました。時に混雑対応に苦慮する場面もありましたが、幹部スタッフの迅速な判断と連携により、混乱なく乗り切ることができました。

準備期間においては、大小さまざまな課題に直面しながらも、委員同士の強い絆と、上級生からの温かいアドバイスに支えられ、協力体制を築きながらそれらを克服する過程で、学年間の結束がより一層深まる収穫も得ることができました。

当日は、大きな事故もなく無事に終了しました。ステージ公演で

は、学生たちが日頃の練習成果を存分に発揮し、観客の心を大いに魅了しました。模擬店での活気ある接客、研究発表に耳を傾ける来場者の笑顔、久々に母校を訪れた卒業生の懐かしそうな表情、そして大役を終えた委員たちの誇らしい笑顔が星薬祭の随所に見受けられ、まさに多くの「Sparkle」が集う場となりました。

最後に、本祭の開催にあたり多大なるご支援を賜りました父母会・揺籃会ならびに同窓会の皆様をはじめ、ご協力くださったすべての方々へ心より感謝申し上げます。皆様の支えがあってこそ、本祭を成功に導くことができました。改めて御礼申し上げます。





まず初めに、第52回星葉祭を開催するにあたり、学長先生をはじめとする教職員の皆様、揺籃会、同窓会、その他関係者の皆様には多大なご理解とご支援

ご協力を賜りましたこと、この場を借りて、心より厚く御礼申し上げます。

今回の星葉祭は、「Sparkle」というテーマのもと、参加するすべての人がそれぞれの場で個性を発揮し輝けるような、また来ていただいた方が笑顔になれるような学祭を目指しました。ようやく活気が戻ってきた昨年度を超えて、我々第52回実行委員会は、それをさらにブラッシュアップし、より質の高い学園祭をつくり上げるべく、委員一丸となって活動してまいりました。

私たちの代は、1年生で制限のない学園祭を経験してから代替わりしたメンバーであったため、自分たちのやりたいことや理想とする学園祭像を明確にしながら準備を進められたと思います。委員それぞれの個性が光るコンテンツが生まれ、まさにテーマ通り、関わった全ての人々が「輝ける」学園祭となったのではないのでしょうか。

ただ一方で、昨年と比較すると、新たな挑戦やこれまでにない企画を生み出すという点では、十分に達成できなかった部分もあったと感じています。だからこそ、今後の星葉祭がどのように進化し、次代の委員たちによってどのように受け継がれ、変化していくのが、今から非常に楽しみです。

私自身は、正直なところ委員長として力不足ではないかと、活動中たくさん悩むことがありました。壁にぶつかることも多く、思い通

りにいかない場面もたくさんありましたが、それでも支えてくれた各部署のリーダーたち、前向きに行動してくれた実行委員の仲間たちをはじめとする多

くの方々のおかげで、最後までやり遂げることができました。また、活動の中で何より自分にとって大きかったのは、この活動を“楽しんで”取り組むことができた事です。日々の準備や本番当日の忙しさの中にも、仲間と笑い合い、支え合いながら前に進んだ時間は、自分の中で強く心に残るかけがえのない思い出となりました。委員のみんなにとっても、この活動が楽しく、良い思い出として記憶に残ってくれていたら、これほど嬉しいことはありません。

今回の星葉祭で特に印象に残ったのは「人と人とのつながり」です。星葉科大学が掲げる「親切第一」の精神が、学園祭期間中はより一層

色濃く感じられ、互いに支え合い、思いやる空気が学内に満ちていました。実行委員全員が明るく、和やかで、そして責任を持って活動してくれたことが、その雰囲気をつくってくれたのだと思います。共に星葉祭を創り上げてくれた実行委員の皆さんにはとても感謝しています。今回の活動を通して得られた人とのつながりや縁を大切にしながら、これからの学生生活を楽しんで欲しいです。ください。

この経験を通して得た学びやつながりを、私は一生の財産として大切にしていきたいと思っています。そしてこの素晴らしい文化と空間が、次代にも受け継がれ、星葉祭がますます発展していくことを願っております。

第52回星葉祭 実行委員会委員長
千葉 勇 征

新任教授のご挨拶

薬学教育
研究部門
教授

久保 元

2025年2月1日から、星薬科大学薬学教育研究部門の教授を務めることとなりました久保 元です。私は、千葉大学でマメ科植物に含まれるキノリチジンアルカロイドの研究を行っていました。共同研究を行っていたご縁で1985年に薬品製造化学の助手に採用されて以来、本学で実習や教育に携わってまいりました。その間に、千葉大学薬学部で課程外博士の学位を取得いたしました。今回、薬

学教育部門の責任を担うこととなりました。部門長の山崎教授を補佐していきます。

薬学教育研究部門へは、2008年4月からお世話になっています。星薬科大学の薬剤師国家試験の合格率は、非常に高いものでした。部門のミッションとして、薬剤師国家試験に対して、高い合格率でより多くの学生を合格させることがあります。この高い合格率は、質の高い卒業試験の作成にかかっています。現在、多くの領域の先生方に参加いただきより良い卒業試験問題の作成に努めています。

現在の国家試験のうち、26%に当たる90問は必須形式でCBTの出題形式と同じです。従って、CBTの高い合格率も国家試験につながっています。CBTが始まって、数年間は、再試験の実施などなかったのですが、近年再試験で

も基準に達しない受験生が増えてきています。このため、低学年からCBTや薬剤師国家試験を意識させようと、2年生に対し「基礎薬学演習」を立ち上げ、部門の教員と共に物理・化学・生物の基礎科目の復習を始めました。昨年度、このカリキュラムを受講した学生がCBTを受験しました。2年目の今年度に期待したいと思います。さらに、1年生に対して「サイエンスベースで考えるくすり学」がはじまりました。アクティブラーニング形式の演習講義で、深い処理方略の獲得を目指したものです。

最後になりますが、今後も学問の研鑽に努め、教育に精進し本学の発展に貢献できるよう努力してまいります。定年までの短い間ですがなにとぞよろしくお願い申し上げます。

毒性学
研究室
教授

小川久美子

2025年4月1日付で毒性学研究室教授を拝命いたしました小川久美子と申します。伝統ある星薬科大学の一員として加えていただき、大変光栄に存じます。

私は1988年に名古屋市立大学医学部を卒業したのち病理学教室に籍を置き、実験病理学を基盤とした発がん研究、関連病院での臨床病理診断及び同教室での講義や実習に携わってまいりました。その間に大学院を経て学位を授与い

ただき、米国ネブラスカ州立大学のポストクとして膀胱発がん過程における分化関連因子の異常発現に関する研究等をさせていただきました。また、2005年からは、内閣府食品安全委員会の動物用医薬品専門委員を拝命し、レギュラトリーサイエンスに関わる機会をいただきました。その後、ご縁あって2009年に国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター 病理部に着任し、2025年3月まで食品添加物を含む各種化学物質の安全性評価やその評価法に関する研究及び厚労省や医薬品医療機器総合機構等の行政対応に従事してまいりました。

医薬品のみならず、環境中でヒトが意図的に摂取する、あるいは、非意図的に暴露される新規化学物質は年々多種多様になっており、毒性機序の理解と効率的な安全性

評価法の開発はますます重要になってくると考えられます。同時に、忘れた頃に繰り返されてきた薬害や事故の歴史を断ち切るためにも、薬品を扱うことになる学生さんに有効性と毒性は紙一重であり、適切に利用することの大切さを伝えていきたいと考えています。

とはいえ、着任して早くも3か月が過ぎようとしています。まだまだ何も貢献できておらず、むしろ心優しい周りの皆様に気遣っていただいているのを感じています。それでも、これまで御指導いただいた皆様に感謝しつつ、医療人・研究者を目指す若い人たちの成長の手助けができるように、そして少しは一緒に成長していけるように精進したいと考えております。御指導御鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

新任教員紹介

分子薬剤学研究室
助教

清水 涼平

2024年6月1日付で分子薬剤学研究室の助教に着任いたしました清水涼平と申します。この度は星薬科大学の教員としてお迎えいただき、誠に光栄に存じます。私は京都薬科大学大学院にてダウン症における発達遅滞に関する研究に従事し、学位取得後は神戸薬科大学微生物化学研究室にて、中枢神経疾患や免疫関連疾患などの分野に関する研究に取り組み、ニューデシンと呼ばれる免疫調節因子について、脳梗塞やがん免疫における多様な分子メカニ

ズムの解析を行ってまいりました。分子薬剤学研究室では、これまでの研究経験を活かし、がん免疫を標的として、mRNAワクチンのような核酸医薬の患部への送達を可能にするドラッグデリバリーシステムの開発に取り組みたいと考えております。本学の発展に少しでも貢献できますよう、教育と研究に誠心誠意日々精進してまいります。皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

薬学教育研究部門
特任助手

江上 佳那

2024年7月1日付で薬学教育研究部門の特任助手に着任いたしました江上佳那と申します。この度、母校である星薬科大学に教員としてお迎えいただき、大変嬉しく思っております。学部生時代には薬学教育研究部門に所属し研究活動を行い、卒業後は病院薬剤師として臨床経験を積んでまいりました。現場や学部生時代に得た知識や経験を本学に還元できることに大きなやりがいを感じております。今後は、学生にとって身近な存在として、国家試

験合格に向けた学修支援はもちろん、日々の学びや悩みにも寄り添えるよう努めてまいります。また、薬学の専門知識だけでなく、臨床現場での実践的な視点も交えながら、より実りある教育を目指してまいります。

本学の教育・研究のさらなる発展に貢献できるよう、日々研鑽を重ねてまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

実務教育研究部門(臨床
薬学研究室I) 准教授

須永 登美子

2024年8月1日付で実務教育研究部門臨床薬学研究室Iの准教授に着任いたしました須永登美子と申します。この度は、星薬科大学の教員としてお迎えいただき、光栄に存じます。

私は、病院薬剤師として主に循環器領域の臨床現場で患者様の薬物治療のみならず、病院実習中の薬学生の指導、医療現場で生じたクリニカルクエッションからシステムティックレビューや症例報告等の臨床研究にも携わってまいりました。特に、コクランシステム

ティックレビューは、米国とイタリアの共同研究に発展し、大変貴重な経験を得ることができました。これらの経験を活かして、将来、チーム医療を通じて薬物治療を実践していくなかで、臨床研究の側面からも活躍できる薬剤師の育成を推進していきたいと考えております。今後も自己研鑽に努め、教育・研究に邁進し、本学の発展に少しでも貢献できるよう努力していく所存です。皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

生体分子有機化学
研究室 講師

池内 和忠

2024年10月1日付で生体分子有機化学研究室の講師に着任いたしました池内和忠と申します。この度は、伝統と実績のある星薬科大学の教員としてお迎えいただき、誠に光栄に存じます。

私は、2008年に静岡県立大学薬学部を卒業後、同大学大学院で博士(薬学)を取得し、これまで複数の大学で教育・研究に従事してまいりました。専門分野が有機合成化学であるため、薬学部より理・理工学部にも所属していた期間の方が長いです。一方で、最終的には

私を育ててくれた薬学部に戻り、恩返しをしたいと熱望しておりました。その夢が実現できる場に身を置けることを大変嬉しく思っております。

本学では、これまでと異なる研究分野、具体的には生体内反応に焦点を当てた生物有機化学に関する研究活動を展開していきたいと考えております。また、本学の学生さんの教育にも力を注いでまいりますので、今後とも皆様のご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

医療薬学研究室
講師

杉山 暁

2025年1月1日付で医療薬学研究室に講師(先端技術講師)として着任いたしました杉山暁と申します。このたびは、星薬科大学にお迎えいただき、誠に光栄に存じます。私は学部では数学を専攻し、大学院から分子生物学の研究に取り組みました。東京大学で博士号(学術)を取得後は、バイオベンチャーにてバイオ医薬品の研究に従事し、その後アカデミアに戻り、がん治療を中心とした放射性医薬品や薬物送達システムの研究開発に注力してまい

りました。現在は、とりわけ抗体ミメティクス薬物複合体の社会実装に向けた研究を進めております。今後は、これまでの研究経験と産学連携の実績を活かし、薬学教育において学際的かつ実践的な学びの場を提供し、次世代の薬剤師・研究者の育成に努めるとともに、本学の発展にも貢献してまいりたいと考えております。引き続き研鑽を重ねてまいりますので、何卒ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

実務教育研究部門(臨床薬学研究室Ⅲ) 准教授

石村 淳

2025年2月1日付で実務教育研究部門臨床薬学研究室Ⅲの准教授に着任しました石村淳と申します。星薬科大学の教員としてお迎えいただき、光栄に感じております。着任前、私は大学病院で10年間、民間グループの急性期および慢性期病院で4年間、臨床現場で病院薬剤師として主に糖尿病の薬物治療に関わり、その後、実務家として5年間、薬学部で教員として過ごしてきました。また、大学院の修士課程では「薬理学」、博士課程では臨床の側面からの

medical questionを基に「臨床薬学」の研究を行ってきました。よく「基礎は基礎、臨床は臨床」などの言葉を耳にしますが、どちらもとても重要であり、融合することで多くの問題解決に繋がると考えています。私の臨床および研究者としての経験を学生教育に活かし、1人でも多くの薬学生が臨床薬剤師や研究に興味を持つ教育が出来るよう日々努力する所存です。皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒、宜しくお願ひ申し上げます。

エピゲノム創薬研究室
講師

立和名 博昭

2025年4月1日付でエピゲノム創薬研究室の講師に着任いたしました、立和名博昭と申します。私はこれまで、DNA配列の変化を伴わずに遺伝子発現を制御するエピジェネティクスの研究を、タンパク質の構造解析から出発し、生化学、細胞生物学やバイオインフォマティクスを取り入れ、進めてまいりました。近年は、乳がんの特徴的なエピゲノム変化の解析を通じて、その発症や薬剤応答に関わる分子機構の解明に取り組んでおります。今後は、

本研究室において、エピゲノムを創薬の標的とする新たな研究を推進し、基礎と応用をつなぐ橋渡しの研究を通して社会に貢献してまいりたいと考えております。また、学生や研究者と共に学び、共に成長していけるような、活発で開かれた研究・教育環境の構築にも尽力してまいります。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

医療データサイエンス
研究室 助教

小林 由幸

2025年4月1日付で医療データサイエンス研究室の助教に着任いたしました小林由幸と申します。この度は、母校である星薬科大学に教員としてお迎えいただき、大変光栄に存じます。私は本学の修士課程を修了後、製薬企業にて医薬品の分析法開発や農薬企業にて承認申請に従事し、その後はコンサルティングファーム等でデータサイエンスを活用した研究開発戦略の策定や新規事業開発を支援してまいりました。その間、筑波大学の博士課程を修

了し、本学で課程外博士を取得いたしました。これまでの実験化学(ウェット)とAI技術(ドライ)双方の経験を融合させ、創薬からレギュラトリーサイエンス、医療情報学まで、医療や薬学に関する幅広い領域でデータサイエンスの応用研究を進めるとともに、その素養を持った次世代の薬剤師・研究者の育成に貢献できるよう精一杯努めてまいります。皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

2025年4月1日付で実務教育研究部門 臨床薬学研究室Ⅲの助教に着任いたしました、篠木真帆と申します。このたびは、伝統ある星薬科大学に教員としてお迎えいただき、大変光栄に存じます。

これまで薬剤師として臨床現場に携わるとともに、スポーツファーマシストとして国際大会やオリンピックの現場にも帯同し、選手の健康と公正な競技環境を支える活動に従事してまいりました。こうした現場経験を通じて、薬学が社会に果たすべき責任の重さと、専門職としての使命感を深く実感しております。

現在は、カフェインをはじめとする薬物使用が競技パフォーマンスに及ぼす影響や、アンチ・ドーピングに関する教育・啓発活動の研究に取り組んでおります。薬学の視点からスポーツ界に貢献できる学際的な取り組みを通じて、学生の皆さんには薬学の新たな可能性や社会的意義を実感していただけるよう努めてまいります。

今後は、教育・研究の両面から本学の発展に貢献できるよう、日々研鑽を積み、誠心誠意取り組んでまいります。皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

実務教育研究部門(臨床薬学研究室Ⅲ) 助教

篠木 真帆

新任職員紹介

総務部

新藤間 忠

2024年10月1日付で総務部に着任致しました。民間企業や大学職員として培った前職の経験を活かし、「大学全体としてどのような効果があるか」を考えて、お役に立てるように頑張ります。どうぞよろしくお願ひ致します。

事務局長

大江 伸吾

2025年4月1日に事務局長を拝命しました。以前は金融関連業務に長く携わっておりました。本学の一員として仕事をさせて頂く事となり、微力ながら誠意を持って業務の遂行をして参る所存です。よろしくお願ひ致します。

アドミッション
オフィス

藤田 昂大

2025年4月1日付でアドミッションオフィスに着任いたしました。これまでの医薬業界における経験を活かし、本学の更なる発展に貢献出来るよう、初心を忘れずに精進していく所存です。よろしくお願ひいたします。

教務部

高橋 和香

2025年6月1日付で教務部に着任いたしました。

一日でも早く業務を覚え、学生や教職員の皆様に寄り添った支援ができればと存じますので、ご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願ひいたします。

学生支援部

日下部まり奈

2025年8月1日付で学生支援部に着任しました。学生皆さんの充実した学生生活の支援に努めるとともに、教職員の皆様と連携を図りながら、円滑な運営を目指してまいります。何卒、よろしくお願ひいたします。

総務部

吉田 裕太

2025年8月1日付で総務部に着任いたしました。過去の製薬業界、大学業界で取り組んだスキルを活かし、1日も早くお役に立てるよう精進してまいります。ご指導の程、よろしくお願ひいたします。

研究室の発足～毒性学研究室～

毒性学研究室 教授 小川久美子



2025年4月に「毒性学研究室」が発足いたしました。医薬品化学研究所の3階に研究室をいただき、酒井寛泰准教授とその指導学生さん(学部生11名+大学院生5名)の合計18名での船出です。ありがたいことに旧疾患解析創薬学研究室(加藤良規先生)の頃の研究機材を残していただき、皆様の御協力を得て研究も開始することができました。

当研究室では、医薬品に加えて、工業用化学物質、農薬、健康食品など、私たちを取り巻く環境中化

学物質を適切に利用するために、それらの生体に対する悪影響(=毒性)を多角的な観点から解析する研究や、リスク評価法に関する研究を通じて、人々の健康な生活への貢献を目指しています。

言うまでもなく、医薬品は「用法用量」を適切に摂取しないと有効性を発揮しないか、あるいは、副作用(リスク)が有効性を上まわってしまいます。それでも、重篤な疾患・症状の治療(ベネフィット)のためには、許容可能な副作用は留意して使用することになります。中には副作用の懸念に対して、同時に副作用を抑える薬の服用が推奨される場合もあります。同様のことが、合成、天然を問わず化学物質一般に起こりうるのです

が、ベネフィットを得るために医療専門家の調整のもとで服用される医薬品と、非意図的に対象を問わず暴露される食品中・環境中の化合物では扱いが異なる筈です。

しかし、ともするときちんと理解されず、「いわゆる健康食品」の過剰摂取による健康被害というような事例が後を絶ちません。このような化学物質摂取のリスクとベネフィットのバランス感覚の啓蒙も、医療・薬の専門家には求められていると考えます。

これまでに培ってきた経験を融合させ、前途しかない若者達と共に、毒性学研究の目的である医薬品の副作用を含む毒性影響の機序解明とその評価法開発、さらには予防法等を研究対象として、有用な化学物質の安全かつ適切な使用に資する研究に取り組んでいきたいと思ひます。どうぞ宜しくお願いいたします。

研究室の発足～行動可塑性制御研究室～

行動可塑性制御研究室 教授 森 友久



2025年4月、「行動可塑性制御研究室」が新たに発足いたしました。「可塑性」とは、経験や環境の変化に応じて柔軟に適応する性質を指します。本研究室では、「止められない…この制御不能を科学する」をスローガンに掲げ、可塑的变化と深く関わる「薬物依存」と「神経変性疾患」を2本柱に研究を展開しています。とりわけ薬物依存の

研究は、旧薬品毒性学教室の系譜を継承する中核テーマであり、星製薬が日本で初めてモルヒネやコカインを製造・販売したという歴史的背景のもと、長年にわたり本学において蓄積されてきた知見があります。この積み重ねは、星薬科大学における緩和医療研究の発展にも貢献してきました。薬物依存は薬学の中でも周縁的と見なされがちです

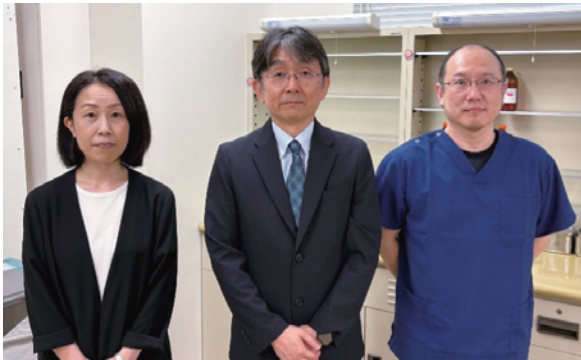
が、薬理学、衛生学、薬事法規、薬物治療、薬剤学、実務に至るまで多面的に関わる重要領域であり、薬剤師国家試験においても頻出分野です。さらに、植物由来の医薬品が治療上の有効性を獲得する一方で、強い依存性をもたらす薬物が派生し、危険ドラッグやオーバードーズが健康を脅かす事態を招いてきました。米国ではオピオ

イド危機が深刻な公衆衛生問題とされ、非常事態宣言も発出されています。当研究室では、こうした現状に対し、学術的意義に加えて、公衆衛生や行政の視点からも社会的価値ある知見の創出を目指します。また、神経変性疾患においても可塑的变化との関係性に着目し、細胞保護や細胞死のメカニズム解明に取り組んでいます。

3年次から卒業まで所属する研究室は、学生にとって大きな「揺籃」です。研究そのものを目的とせず、その過程で「考える力」「知識欲」「探究心」や「コミュニケーション能力」を育む機会としたいと考えています。そして、研究室の集合体である星薬科大学が、卒業生にとって“母校”であると同時に、いつまでも心の“母港”、さらには“誇り”となる存在であり続けられるよう努めてまいります。

研究室の発足～臨床薬学研究室Ⅰ～

臨床薬学研究室Ⅰ 教授 寺門 浩之



実務教育研究部門では、従来より薬剤師の実務教育や臨床薬学分野の教育及び研究を行ってきていますが、2025年4月より研究をより活発にすることを目的として部門内に3つの研究室を設置しました。その一つが、私が所属する「臨床薬学研究室Ⅰ」です。

当研究室は、臨床研究の視点を併せ持ち、チーム医療の中で主体的に活躍できる人材の育成を目指しており、将来、医療の最前線で

薬物治療を担う薬剤師として、科学的根拠に基づいて課題を見出し、解決策を導く力を養うことができるように指導しています。

また、当研究室の教員は、臨床現場で病院薬剤師として5年以上働いた経験があり、医療薬学指導薬剤師やがん薬物療法認定薬剤師等の資格を有し、現在も定期的に臨床現場で研修を継続しています。そのため、臨床現場で生じたクリニカル・クエッションを研究のテーマとすることが多く、多忙な実務教育を担いながら、医療ビッグデータを活用した研究、システムティックレビュー、そして医療機関と連携した臨床研究を積極的に推進しています。

現在、当研究室で実施している

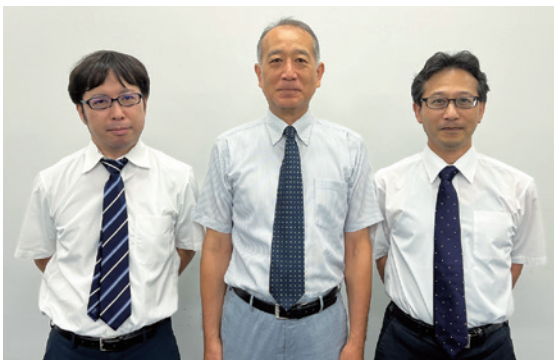
主な研究テーマには次のようなものがあります。①医療ビッグデータを活用した過去10年間の不適切な処方薬の傾向分析及びポリファーマシー対策の評価、②医療ビッグデータを活用したがん合併心不全患者の臨床的特徴や臨床転帰を解明する研究、③がん薬物治療における病院および薬局薬剤師による患者支援の貢献度評価など。これらの研究は、昭和医科大学グループ病院をはじめ、国立国際医療センター、日本赤十字社医療センター、北海道医療大学など、複数の医療機関との連携により実施しています。

当研究室には、現在、私と須永登美子准教授、渡部智文助教の3名の教員が在籍しており、実践的な薬剤師の育成と臨床研究の推進に努めています。

これからも、どうぞよろしくお願いたします。

研究室の発足～臨床薬学研究室Ⅱ～

臨床薬学研究室Ⅱ 教授 町田 昌明



2025年4月、「臨床薬学研究室Ⅱ」が発足いたしました。これまで、薬剤師としての実務経験を有する教員は、実務教育研究部門のもとで共に活動していましたが、各教員の専門性や研究テーマを踏まえ、3つの研究室に再編されました。本研究室はそのうちのひとつとして設立されたものです。

薬剤師の研究には、カルテ調査などを基盤とする後ろ向き研究から、介入を伴う前向き研究まで多

様なスタイルがあり、また対象とする施設によっても性質が異なります。病院を拠点とする研究では、がん、感染症、精神疾患など急性期疾患の治療が主なテーマとなる一方、保険薬局を拠点とする研究では、公衆衛生、OTC医薬品、セルフメディケーション、代替医療など、健康の維持・増進を目的としたテーマが中心となります。

臨床薬学研究室Ⅱでは、保険薬局を基盤とし、公衆衛生やセルフメディケーションに関する独自の介入研究を通じて、エビデンスを創出する前向き研究に取り組んでいます。薬剤師の制度的役割や職能の高度化には、エビデンスに基づく研究が不可欠であり、本研究室の取り組みはその実現に資するものと考えています。

また、近年では薬剤師にも統計学の素養が求められています。日常業務から得られる臨床データを自ら解析し、実践に還元できる人材の育成は、今後ますます重要です。本研究室では、生の臨床データを用いた実践的かつ高度なデータ解析を指導し、臨床現場で主体的に活躍できる薬剤師の育成を目指しています。

研究室は、町田教授、湧井准教授、白水講師の3名で構成されており、それぞれが豊富な臨床経験と専門的知見を活かして、研究を通じた教育の充実に努めています。発足間もない段階ではありますが、今後は学部教育にとどまらず、現場で働く薬剤師の研究支援や社会人博士の受け入れも視野に入れ、社会に貢献できる薬剤師の育成に取り組んでまいります。

どうぞ、臨床薬学研究室Ⅱをよろしくお願いたします。

研究室の発足～臨床薬学研究室Ⅲ～

臨床薬学研究室Ⅲ 教授 佐野 元彦



2025年4月に臨床薬学研究室Ⅲが発足しました。本研究室は、第2新館6階に拠点を構え、教授の私をはじめ、准教授の石村淳先生、助教の篠木真帆先生の3名の教員で、「患者中心の医療に貢献できる薬剤師」の育成を目指し、臨床現場と密接に連携した研究と教育に取り組んでいます。

近年、病棟薬剤師の配置や薬剤師外来の設置が進み、薬剤師の臨床現場での役割はますます重要に

なっています。こうした状況を踏まえ、私たちは臨床現場から生まれるメディカルクエスチョンを研究の出発点とし、それらを未来への解決策に変えることを使命としています。

具体的な研究テーマは、がんや糖尿病などのリアルワールドデータを活用した薬物治療の評価から始まり、個別化医療に資する薬物動態の解析、薬剤の費用対効果分析、薬剤師介入による治療最適化まで幅広く手がけています。さらに、スポーツファーマシー分野では、アスリートへの薬学的支援や健康課題に対する実践的な課題に対する研究を行い、スポーツファーマシストの視点からアンチ・ドーピング啓発にも取

り取り組んでいます。

教育面では、単なる薬学の専門知識の習得を超えて、「なぜその研究が必要なのか」という本質的な問いを重視し、学生が論理的思考力を身につけられるように指導しています。さらに、思考力・俯瞰力・共感力を兼ね備え、患者や医療チームから真に信頼される薬剤師の育成のために、学生一人ひとりの探究心と実際の臨床現場で生じる問題を科学的手法で解決するプロセスを通じた研究能力を大切に考えています。

私たちは、臨床現場のニーズに応える研究を通じて薬剤師の職能拡大と医療の質向上に貢献し、その成果を学会報告や学術論文として発表しています。学生諸君の柔軟な発想とアイデアに大いに期待していますので、薬学の力で未来の医療を支える第一歩を私たちと共に踏み出していきましょう。

2025年度 大谷孝吉記念賞を受領して

生成 AIと分子動力学シミュレーションを融合した精密分子設計学の創成



薬品物理化学
研究室
准教授

山下 雄史

この度は、2025年度大谷孝吉記念賞という栄えある賞を賜り、心より御礼申し上げます。大谷卓男理事長、牛島俊和学長ならびに選考委員の先生方に深謝申し上げます。

今、計算化学と情報化学は歴史的な転換期にあります。2024年ノーベル化学賞が AIによるタンパク質の立体構造予測および分子設計技術の創成に授与されたことは、この分野への期待を象徴しています。また、

ExaFLOPS級スーパーコンピュータが稼働し、多様な計算予測・解析技術が飛躍的に発展しています。こうした革新的技術を基盤に、AIが描く「分子の静止画」と分子動力学(MD)シミュレーションが捉える「分子の動画」を重ね、設計精度を飛躍させる——これが私たちの掲げる『精密分子設計学』です。

これまで、私たちはMDを活用し、創薬技術の革新に取り組んできました。低分子医薬品開発では、結合自由エネルギー予測法MP-CAFEEを「京」「富岳」に実装し、候補分子の結合力を高精度で予測する基盤を確立しました。この成果は、開発過程の効率化をもたらす鍵になると期待されています。抗体などバイオ医薬品の設計でも、界面のわずかな揺らぎを活かして結合を強める機構を明らかにし、親和性向上戦略のパラダイ

ム転換をもたらしました。

現在は、生成AIが提案する膨大な人工抗体候補をMDで絞り込み、最終的に実験で検証する「三位一体」プラットフォームを構築中です。この枠組みは難病・希少疾患の治療、個別化医療、機能性材料設計、分子ロボティクスなどにも貢献すると考えています。教育面でも学生をAI×MD研究の最前線に参画させ、計算と実験を往復できる次世代人材を育成しています。

最後になりましたが、日々挑戦を共にする薬品物理化学研究室の井上元基講師と学生の皆様、日頃支えてくださる職員の皆様・共同研究者の皆様に深く感謝申し上げます。本賞を励みに研究・教育・社会貢献の三輪を加速させ、未来の医療に尽力いたします。今後とも変わらぬご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

中枢神経に作用する天然由来小分子の化学構造と血液脳関門透過性の相関研究



生体分子有機
化学研究室
講師

池内 和忠

この度は、2025年度大谷孝吉記念賞の研究奨励金をいただきまして、誠にありがとうございます。大谷卓男理事長に心より御礼申し上げますとともに、牛島俊和学長をはじめとする選考委員の先生方に感謝申し上げます。

本研究は、私が専門とする有機合成化学を薬学研究にどのように発展させていくか熟考していく中で、血液脳関門(BBB)を研究している前職

の名古屋市立大学大学院薬学研究科 坂下真大 准教授とのディスカッションを通して着想した内容となっております。

中枢神経系の医薬品開発において、薬物のBBBの透過性の良し悪しを議論することは必要不可欠です。しかし、どのような薬物がBBBを透過しやすいか系統的に明らかになっておらず、実際に評価してみないと分からないのが現状です。本研究課題では、中枢神経系に作用する天然物の一つであるコリアミルチンをBBB透過性が高い有機化合物と発想し、コリアミルチンが何故BBBを透過しやすいか有機合成の視点から解明することを目的としています。私は、コリアミルチンの化学合成法を2023年に確立しており、その方法を応用することでコリアミルチンの誘

導体及び類縁体天然物が網羅的に化学合成できると考えております。そして、坂下准教授との共同研究を通して、合成した化合物のBBB透過性を評価し、高い脳移行性を示す要因となる化学構造を明らかにしていきます。本研究が達成できれば、化合物の構造とBBB透過性との相関関係を明らかになり、中枢神経系の創薬研究の発展に貢献できます。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたり、多大なるご指導とご支援を賜りました生体分子有機化学研究室の叶直樹教授、ならびに共同研究をご快諾いただきました名古屋市立大学大学院薬学研究科 坂下真大准教授に深く感謝申し上げます。また、本研究の基礎的な部分を共に遂行してくださった学生の皆様にも心より御礼申し上げます。

大谷孝吉記念賞は、故大谷孝吉名誉理事長より本学に寄せられた奨学寄付金を基に、本学の研究振興に資する目的で1998(平成10)年に制定されました。助成金は、学内外の評価に耐えうる優秀な研究業績をあげた者又はあげる可能性のある者を対象として授与する研究奨励金と、若手研究者の学外との研究交流に対する助成から成ります。受領者は、表彰選考委員会において応募者より選考されます。

星薬科大学に入学して



薬学科2年

小山 佳子

出身高校：神奈川大学附属高等学校

所属クラブ：弓道部、茶道部

趣味・特技：テニス、ピアノ

星薬科大学に入学してから、早くも一年が経ちました。新しい学びと貴重な経験に満ちた本学での学生生活は、日々とても充実しています。

入学当初は、薬学という専門的な分野に対して漠然とした不安があり、この選択が本当に自分に合っているのか、自信を持てずに悩むこともありました。しかし、授業や実習を通して薬学の奥深さを学ぶうちに、少しずつこの道を選んだ意味を自分なりに見出せるようになってきたと感じています。

特に薬学は、医療現場にとどまらず、製薬・行政・教育・環境分野など、幅広い領域でその専門性が求められています。また、そうした多面的な社会との関わり方に、大きな魅力を感じています。将来は、薬学の知見を活かして、人々の健康や医療の質の向上に貢献できる仕事に携わりたいと考えています。

大学では、学業と並行して部活動にも力を入れています。現在私は弓道部の部長を務めており、仲間とともに練習に励んでいます。大会への準備や後輩の指導、部の運営など、責任を感じる場面も多いですが、その分得られた学びから大きな刺激を受けています。

また、茶道を通じて、留学生と交流する機会もありました。言語や文化の違いを越え、互いの背景を尊重し合う温かさが特に印象的でした。国は違えども、人とのつながりを大切にするという点で深く通じるものがあると感じました。

そして何よりも、大きな支えになっているのが一緒に過ごす友人たちの存在です。他愛のない会話で笑い合ったり、テスト前に励まし合ったり、ときには一緒に出かけて気分転換をしたり——そんな時間の積み重ねが、私にとってかけがえのない宝物となっています。

忙しい毎日ではありますが、そうした中で得られる学びや出会いのひとつひとつが、自分自身の考え方を豊かにしてくれていることを、日々実感しています。これからもこの環境に感謝しながら、目の前のことに丁寧に向き合い、自分らしく前へと歩み続けていきたいです。



大学友人とUSJにて



医歯薬リーグにて



茶道部にて



星薬祭にて

星薬科大学に入学して



創薬科学科2年

泉水 元

出身高校：埼玉県立不動岡高等学校
所属クラブ：軽音楽部、フットサリスト
趣味：サッカー、音楽

◀お気に入りの写真



軽音部での活動

星薬科大学に入学してから、多くを学び、人間関係に恵まれた充実した1年を過ごすことができました。限りのある日常を余すことなく大切に、悔いのないように過ごしたいと思い生活しています。

私は、幼い頃から化学や研究が好きで漠然と研究者になりたいと思い、勉学に励んでいました。年齢を重ねて将来のプランを考えていくうちに、「自分の好きなことをしながら人を助けて社会に貢献したい」という結論に至り、当時の高校の先生に薬学部や創薬化学科について教えていただき、そこから勉強に勤しんで本学に入学いたしました。正直なところ、入学した今もまだ、明確なキャリアの目標は定まっていません。製薬会社の研究職や開発職にも興味がありますし、大学の講義で学んだ品質管理の分野にも面白さを感じています。まだまだ、これから知っていく世界もたくさんあると思います。これからの大学生活でたくさんの知識、経験を得て「自分が誇りをもて、熱中できる」そんな場所を見つけていきたいです。

現在は、講義で学ぶ機会のあったアルツハイマー病の治療に興味を持っています。アルツハイマー病はいまだに原因が完全に解明されておらず、根治する治療薬のない多くの課題を抱える病気です。そして、人が生きていくうえでかけがえのない記憶をむしろ失ってしまう、非常に悲しい病気だと思います。私には幼い頃から同居している祖父母がいます。今は元気な祖父母がもしこの病気を患ってしまったらと

思うと、胸が締めつけられ、実際に苦しんでいる方々の存在にも意識が向くようになりました。そうした思いから、この病気への関心が高まり、より深く理解したいと考えるようになりました。まだ馴染みのない分野ではありますが、少しずつ知識を深めながら、自分の気なることを追求していきたいです。

この1年間の大学生活は本当に充実していたと思います。サークルはフットサリストと軽音学部にも所属し、どちらも精力的に活動してきました。フットサリストでは普段からずっと一緒にいる、信頼のできる大切な仲間ができました。軽音学部では、今年度から部長をさせていただき、多くの責任を背負いながらも自分の大好きな音楽に熱中しています。この1年はサークル活動を通じて、一生の友人となる仲間や、心から尊敬できる先輩など、立場、年齢、性格の異なる多くの方々とのかけがえのない出会いに溢れ、自分の世界が大きく広がったように感じています。

これからの大学生活でも、多様な知識や体験を積み重ね、自分の将来をしっかりと見定めていきたいと考えています。そして、人との出会いを大切にしながら、素晴らしい時間を過ごしていきたいと思っています。



高校時代(サッカー部)



フットサリスト集合写真



フットサリストでの友人達(夏合宿)

学校法人星薬科大学修学支援基金 寄付者ご芳名

(期間：2024年4月1日～2025年6月30日)

ご寄付を賜りました皆様のご厚志に感謝し、ここにご芳名を掲載させていただきます。

※五十音順で掲載しております(希望されない方を除く)。

※敬称は省略しております。

10万円以上の寄付者

庭山 邦子
水島 規子
山下 聖児
林 成忠
安岡 利道

梶野 忠
金子 真衣
鎬城 正
鎌田 裕美
川上 学
菊池 順子
金 至子

高木 明美
田代 貢一
立原 一良
鶴岡 徳江
寺門 由美子
遠山 幸子
中川 晴子

10万円以下の寄付者

相田 裕子
阿川 敏恵
秋嶋 純子
網野 裕佳子
新井 恵美子
新井 宏和
有元 利之
安藤 由喜子
安藤 理愛
井口 英理加
池上 一平
池田 和馬
石田 敏子
井出 典子
伊藤 成
伊東 隆
稲岡 和生
入山 正明
植野 弘子
牛島 俊和
江口 昌宏
遠藤 道政
大重 基
大竹 江美子
岡野 よ祐子
織井 公望
甲斐 勝久
加賀 英樹
笠原 康裕

木村 雅江
久保 智
桑垣 幸人
小池 順一
木暮 あづさ
小林 静史
小林 晴美
小林 康郎
小原 朝美
小松 哲
斎藤 英治
齋藤 龍也
齋藤 治子
櫻井 将
佐竹 正子
佐藤 武史
佐藤 博
佐藤 弥佐枝
佐藤 ゆかり
佐藤 義朗
島田 孝治
正能 佳子
菅原 善博
杉浦(大野)紫穂
杉田 和幸
杉山 清
杉山 喜子
須澤 まゆみ
鈴木(繁松)達弥
関野 翔太

流田 康雄
生井 恵子
花内 玲子
林 智美
林 裕美子
板東 和子
東 真理子
久富 理恵
平井 政己
平川 桃有里
平田 潔
平田 義武
福島 つかさ
船田 一夫
船見 正範
細江 智夫
細田 宥美
前之園 薫
松井 啓太
宮田 かをる
森嶋 まつ子
森田 博史
山川 和子
湯浅 享子
湯本 哲郎
横井 裕
横山 芳子
吉川 りり子
吉野 敦彦
湧井 宣行

ク ラ ブ 紹 介



硬式テニス部

こんにちは！硬式テニス部です。

現在、硬式テニス部は男子33人女子34人の計67人で活動しています。全体での練習は水曜日と土曜日の週2回行っており、限られた時間の中で、全員が集中して切磋琢磨しながら取り組んでいます。その練習の成果として、今年度は薬連の団体戦で女子が優勝、男子が準優勝という成績を取ることができました。男子は2連覇がかかっていましたが惜しくも決勝で敗れ、悔しさの残る結果となりました。その悔しさを糧に、新しく入部した一年生とともに気持ちを新たに、さらなる高みを目指し、日々練習に励んでいます。

ここで、硬式テニス部の年中行事を紹介したいと思います。まず初めに、4月に薬連の団体戦があります。私たちはこの団体戦で優勝できるよう日々練習に取り組んでいます。

夏休みには白子で2泊3日の合宿を行っています。朝から夕方までみっちり練習を行い、シング

ルスやダブルスのトーナメント戦、部内での団体戦を実施しています。実践的な内容でありながら、仲間とともに楽しく充実した時間を過ごしています。夜には白子の海で花火を楽しむなど、仲間との交流の時間もあり、とても思い出に残る夏合宿となっています。また、夏には薬連と理工連の個人戦も開催されます。新年度が始まり、最初で最後の個人としての実力が試される場となります。昨年は男女ともに準優勝と健闘したものの、あと一歩届かず悔しい結果となりましたが、今年こそは優勝を目指そうと一層気合が入っています。

秋には、理工連の団体戦に参加しています。昨年度は接戦を制し、女子が4部、男子が9部へと昇格を果たしました。以前は男女ともに上位のグループに所属していたので私たちもさらに上位のグループに昇格できるよう練習に励んでいます。

春休みにも白子で2泊3日の春合宿を行っており、1年間でどれほど

成長できたかを確認する良い機会となっています。新体制へ移行する前の最後の行事となるため、後輩に伝統を引き継ぎながら練習に励みます。旅館ではみんなでゲームを通して親睦を深めるなど、心に残る充実した合宿となっています。

このほかにも硬式テニス部には様々な行事があります。そのため、同期だけでなく、先輩や後輩とも親しくなりやすく、学年を超えた繋がりを築くことができます。大学生活を楽しみながら一生の仲間を作りたい人にも、大学から本気でテニスに取り組みたい人にも、ピッタリな部活動です。ぜひ興味ある方は見学や体験にお越しください！

最後になりますが、日頃より支えてくださっている皆様への感謝の気持ちを忘れずに、良い結果を残せるよう日々精進して参ります。今後とも温かい応援のほどよろしくお願いたします。

硬式テニス部
部長 山下 祐一



ク ラ ブ 紹 介



箏曲部

こんにちは。箏曲部です。箏曲部は日本の伝統楽器であるお琴を弾く部活です。コロナ渦で廃部寸前となっていた部活を今の3年生が立ちあげ直してくださった新しい部活でもあります。流派は生田流です。部員は1年生2人2年生5人3年生3人の計10人で、ほとんどが大学でお琴を始めた初心者です。練習場所は百年記念館3階にある和室「幽寂」で、火曜日、水曜日、金曜日に合奏や自主練習などを行っています。週3日のすべての活動日に参加が必須というわけではなく、合奏やレッスン以外は自主練習の時間となっているため、兼部やアルバイトとの両立もできます。少人数の部活ではありますが、その分、部員全員の予定に合わせて合奏の予定を組むことができ、

和気あいあいと活動しています。活動内容は、発表に向けて自分たちで選曲した楽曲を練習するとともに、月に2、3回程度、外部の先生による指導を受けています。演奏する曲は、古典から現代曲、ポップスまで幅広いジャンルにわたります。昨年の発表では、天空の城ラピュタの主題歌である「君をのせて」や、この音とまれの主題歌である「龍星群」を弾き、多くの方々にご来場いただくことができました。部費は道具代や外部の先生によるレッスン代も含めて年間5000円で、個人でお琴を習うよりも手軽な費用で練習することができます。

箏曲部の定例イベントは星薬祭での発表になりますが、指導をしていただいている先生のご紹介で

地域のお祭りにも参加しています。昨年は、みどりと花のフェスティバルでの野外演奏、旗岡八幡神社の神楽殿での演奏など多くのイベントに参加することができました。また、星薬祭での箏曲部の発表をご覧になられた学長先生からお声がけをいただき、学会の余興として、ホテルニューオータニにて演奏をさせていただくという、大変貴重な機会にも恵まれました。

顧問の先生やレッスンをしてくださる先生、先輩などの多くの方の支えがあり、成長することができました。これからも、日々の練習を通して部員全員で協力し、多くの発表を経験して成長し、精進して参りたいと思っています。

箏曲部
部長 吉澤 樹



学校法人星薬科大学 修学支援基金について

星薬科大学は、1911年に設立された星製薬株式会社の教育部門を起源とし、110年を超える伝統を有します。創立者である星一が掲げた建学の精神「本学は、薬学を通じて、世界に奉仕する人材育成の揺籃である」及び教育理念「親切第一」に基づき、高い志とグローバルな視点を持ち、多方面で活躍する人材を長年育成・輩出してきました。

また、本学は製薬会社を創立の起源とすることから、研究型大学としての特色を有し、産学官連携等を通して研究の成果を社会に還元してきました。さらに、認定薬剤師研修制度の導入、薬業団体との連携協力、都心で有数の規模を誇る薬用植物園の開放等、社会貢献にも全学的に取り組んできました。

他方、大学を取り巻く社会経済情勢は、少子高齢化の進展、情報通信技術を始めとする科学技術の急速な発展等により近年大きく変化しています。伝統と実績を有する本学においても、これらの変化に的確に対応し社会から求められる使命を果たしていくためには、教育研究の体制をソフト、ハードの両面で継続的に整備・改革していく必要に迫られています。

そこで、本学は、2021年に「星薬科大学基金(現:星薬科大学修学支援基金)」を設立し、在学生の修学支援や教育研究環境の整備等を図ることといたしました。卒業生を始め、関係者、関係団体の皆様におかれましては、本趣旨にご理解いただき、ご支援を賜りますようお願いいたします。





HOSHI UNIVERSITY

2-4-41 EBARA, SHINAGAWA-KU, TOKYO 142-8501, JAPAN PHONE 03 3786 1011 FAX 03 3787 0036

<https://www.hoshi.ac.jp>

星薬科大学 出版・刊行物委員会(学報担当)

〒142-8501 東京都品川区荏原2-4-41 TEL 03(3786)1011
ホームページアドレス(URL) <https://www.hoshi.ac.jp>
